

「不信仰で終わらせない」

名古屋東教会 清水 百合



イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信する者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください。」

マルコ9・23〜24

洗礼式において、主が新しい魂を救われるのを目の前で見せて戴く時、私たちは何にも勝る大きな喜びを味わいます。それは、放蕩息子^{たんとし}のたとえのごとく「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった我が子」のために祝宴を開かれる父なる神の喜びが私たちの内に溢れるからであり、同時に、キリストのお体なる教会に共につながる者として、この方の救いのために、祈らせ、関わらせ、労させて下さった主の恵みに感動を覚え感謝するからです。

さて、私ほとてもマイナス思考の強い者として主がお創りになられたようです。例えば何がことに当る時には、先ず、できない方に目を留めてしまい不安や恐れを強く感じて躊躇^{ちゅうちよ}します。ほんとに自分でも嫌になるほどの損な性分です。自分が理想とす

る献身者（牧師）像とは全く反対の位置にいます。しかし、主は確かに私をこのありのまままで召され、あるがままで用いておられます。『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』と、かつて慰め励まして下さったお約束は真実です。

真に主は憐み深いお優しい方で、決して私たちを見捨てず離れないばかりか、全知全能なるお力をもって私たちの内で働かれ弱いまま用いて次々と魂を救って行かれます。結局私たちに必要なのは、この内住のキリストに全く信頼する信仰だけで良いのではないのでしょうか。

冒頭の父親は悪霊に取りつかれて苦しむ息子^{むしご}を、イエス様なら救って下さるのではないかと慕^もにもするが思いでここに連れて来ました。彼には確かに主に対する信仰心があったと言えるでしょう。だからこそ主は彼をもっとご自分に信頼する者とする為にこの言葉でチャレンジされました。

私たちにも彼と同じく主が与えて下さった信仰が既にあります。また、彼同様不信仰に陥り易い弱者である事も百もご承知です。主が嘆かれるのは、私たち自身ではなくその不信仰です。「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」と叫びながら愛する方たち・子供たちを主のみもとにお連れしましょう。必ず救って下さいます！

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「カウンセリング・個人伝道②」	4
使徒の働き・黙示録	7 / 7 / 7 / 14
旧約聖書⑨「預言者」	7 / 21 / 8 / 18
キリストの宣教開始	8 / 25 / 9 / 29
牧羊ひろば（垂水教会）	
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 「ホーリネス・」「ホ・」……………日本ホーリネス教団
 「インマヌエル・」「イン・」……………インマヌエル教会学校部
 「日キ・」……………日本キリスト教団出版局

クリストにある生涯
コリント5・17

●使徒の働き・黙示録

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月7日	信仰による救い	使徒16・25〜34	同31節
14日	聖なる都	黙示録21・22〜22・5	同23節

●旧約⑨預言者

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月21日	生きて働かれる神	列王上17・1〜16	同1節
28日	神のための戦い	列王上18・20〜40	同24節

●クリストの宣教開始

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
8月4日	大勇士の癒し	列王下5・1〜14	同13節
11日	神の前を離れて	ヨナ1・1〜17	同9節
18日	神の憐れみによる宣教	ヨナ3・1〜4・12	同4・11節
8月25日	神の心にかなう者	マタイ3・13〜17	同15節
9月1日	ラリデー 退けるべき誘惑	マタイ4・1〜11	同10節
8日	新生への招き	ヨハネ3・1〜15	同3節
15日	生ける水への招き	ヨハネ4・4〜26	同14節
22日	神の国の福音	マルコ1・14、15	同15節
29日	クリストの弟子として	ルカ5・1〜11	同11節

「キャンプのカウンセリングと個人伝道②」

千里聖三一教会 金井由嗣



1. 関係作り

短期間のキャンプでは、スタッフとキャンパーとの信頼関係を築くことが何より大切です。思春期のキャンパーの場合、他人に心を開くことや心理的距離を縮めること自体が難しいことも理解しておきたいものです。

(1) 急がない。

キャンプ期間の短さを思うと、カウンセリングの時間は少しでも多く取りたいと思うものです。語られたメッセージへの応答、み言葉の深い学びと個人的な適用という目標に向けて話を進めたいとも思うでしょう。でも、ちょっと待ってください。個人的に心を開くことのできる関係がないと、単なる「お勉強」に終わってしまいかねません。特にクリスチャンホームの子どもは、聖書の

「お勉強」で「正解」を出すことには慣れていきます。堅苦しい分級をさっさと終わらせて友達と遊ぶために先生の話につきあつて「正解」を出しておく。自分の問題や内面の悩みは表に出さず、すり抜けてしまう「技術」を、彼らは持つてしまっているのです。聖書のメッセージを深く個人的に適用するためには、彼らと個人的に心を開いて話せるようになるための関係作りに十分な時間をかける必要があります。

(2) 「アイス・ブレイク」の努力を(キャンプ全体で、グループで、一対一で)。

互いに心を開くためには、カウンセラー個人ではなくキャンプ全体での取り組みが必要です。最近はキャンプ序盤のプログラムに「アイス・ブレイク」を意識した取り組みが見られることが普通になってきました。その段階でどれだけ心理的な距離感を縮める

ことができるか。後のカウンセリングの成否は、そこで決まってくると言っても過言ではありません。グループ単位の活動の時間があれば、その中でお互いを知るための努力をしましょう。教師がリードしすぎると、キャンパーの個性や主体性が出てくる機会を失ってしまいます。それぞれの個性を見極めながら、その人に合ったペースでキャンプに「入っていく」ことができるよう、見守りましょう。グループで一緒に何かを達成するプログラムは、特に効果があります。機会を見て個人的に語りかけることも大切です。

(3) 自分からまず心を開く。

オープンな関係を築くためには、まず教師の側が心を開いて近づいていく必要があります。といっても、無遠慮に近づいていくわけではありません。自分の個性、人間性、信仰者としての姿勢を包み隠さず、長所も短所も含めて明かしていくことが望ましいのです。自分がキャンパーのどのような期待に応えられるか、あるいは応えられないか。教師・スタッフとしての「キャラ」が明確に伝わるなら、キャンパーの側でもそのようなキャラとして接してくれるようになります。

※ある予備校で生徒に人気のある教師について調べた所、「面白

くて楽しい」「実力で勝負」「悩みを親身に聞いてくれる」という3タイプの教師像が挙げられたそうです。面白いことに、すべてをバランスよく兼ね備えた教師よりも特定のキャラクターが明確になっている教師の方が生徒から支持されるようです。また受験までの時期や生徒の状況によって、どのタイプに人気に向かうかも変わってきます(河合隼雄『ころの処方箋』新潮文庫)。

(4) 適切な距離感はその人ごと、キャンプのたびごとに違う。

すべてのキャンパーが、教師とのオープンな関係を望んでいるわけではありません。思春期の生徒であればその時期特有の、人に対する警戒感もあります。距離が近くなるとかえって心を閉ざしてしまう場合も少なくありません。教師としては祈って最善を探りつつ、生徒の側で心を開いてくれるのを「待つ」ことが必要です。たとえその時のキャンプで心を開いたカウンセリングができなくても、それを「失敗」と捉える必要はありません。「この先生は無理強いしない」という信頼感を与えることができれば、それも一つの収穫です。その生徒に次の機会を与えてくださる神様に信頼しましょう。

どの程度の「距離感」が適切かは、一人一人みな違います。年齢差、性差、個人差があります。スタッフとキャンパーが同性か異性か、年齢が近いか遠いかによっても変わります。以前に担当したことのあるキャンパーでも、その時と同じ距離感でよいとは限りません。思春期の生徒は一年で大きく変わるからです。毎回、祈りながら、悩みながら、接していく以外にはありません。過去の「成功体験」に頼ることは、もつとも危険です。むしろ失敗を重ねながらそこから学んでいくことの方が大事かもしれません。良いカウンセラーになるためには必要なのは「悩む力」と、悩みつつなお主に信頼する「信じる力」ではないか。そう思われます。

(5) 一人で背負い込まない。

キャンプでのカウンセリングは、スタッフ全体（さらにはキャンパーたちも含めて）の共同作業です。一対一でカウンセリングを担当しているときでも、決して個人プレーではないのです。さらに言えば、クリスチャンのキャンプは「クリストの体なる教会」のわざです。自分一人で完結させる必要はないし、完結すべきでもないということをおきましよう。一回のキャンプで望ましい結果が出なくても、教会を通して神様がその人に関わり続けてくださいます。自分の手に負えない問題があれば、適切な誰か

に橋渡しすることも必要です。

2. 「聞く」カウンセリング

キャンプでのカウンセリングに期待される結果（ゴール）は、一人一人違ってきます。画一的な結果を求めないように気をつけましょう。カウンセラーはまず、キャンパーと一緒にあって「このキャンプでのゴールをどこに求めるべきか」を見定めていく必要があります。そのためにまず必要なのは、彼らの声に耳を傾けることです。

(1) 「聞く」ための前提（参照：デイビッド・アウグスバー

ガー『親身に聞く』すぐ書房）

①あなたと私は同じ（理解の土台）。

話を聞いて理解するためには、話し手と聞き手が何かを「共有」していることが必要です。まずお互いの共通点を見つけるように努めましょう。音楽、アニメ、スポーツ、好きな食べ物、ファッションなど。聖書や信仰に直接関係なくても、あまり高尚な話題でなくても構いません。同じレベルで語り合える話題を通して、「話す、聞く」という会話のキャッチボールをすることが大事なのです。昔流行したもののリバイバルなど世代が違ってても意外な接

点が存在する場合がありますが、どうしても接点が見つからなければ今の若者文化について彼らから「教えてもらおう」ことにしましょう。「教師―生徒」という関係が逆転することで、一気に話しやすくなる場合もあります。

②あなたと私は違う(理解の努力)。

話を聞くことに意味があるのは、そこに聞き手にとっての「新しい情報」が含まれているからです。お互いが「違う」ということを理解しておくことも大事です。自分の経験で相手の話を判断することには注意が必要です。100%同じ経験など人間には存在しないのに、自分の経験の範囲で「理解」したつもりになってしまうからです。キャンパーの話に耳を傾けることで、その人の新しい一面を発見し、その発見を喜ぶ。それは教師自身の喜びであると同時に、「この人は私に関心を持って受け入れてくれる」とのメッセージを発信することにもなります。自分の常識と違う事柄についても、いきなり否定するのではなく「なぜこの人はこのように考えるのか」を理解し、その人自身を受け入れることが必要です。

(2)心得ておくべきこと

①環境への配慮。

他の人に話の内容を聞かれない、閉じた空間にしない、暑すぎ

ない、寒すぎない、明るすぎない、暗すぎない。リラクセスして、かつ集中して会話するためには、こうしたことへの配慮が必要です。緊張している相手には「逃げ場」を用意しておくことも時に必要です。

②最後まで聞く。批判しない。答を用意しない。

相手を本当に理解するためには、話を最後までしっかりと聞くことが必要です。多くの場合、私たちは聞いている途中で先の展開を予想しています。教師の立場であれば、つい「答」を考えながら聞いてしまいます。けれどもその場合、自分が「答」を見つけたと思っただ後は、話を聞いているつもりでも本当には聞いていないのです。あるいは、自分が用意した「答」に合わせて相手の話を理解していきがちです。それは本当に相手を理解するために「聞く」ことにはなりません。否定的な反応(批判)の場合はなおさらです。相手の話の一部に対して批判を抱いた瞬間から、「批判を伝えること」に関心が集中してしまい、その先の話を聞けなくなってしまうのです。相手が話し終えるまで「答」を出さないようにするには、それなりの自覚と努力が必要です。

③「聞きっぱなし」にはしない。

相手の話に関心を持っていることを示すことは、話し手のモチベーションを持続させる上で大事なことです。適切な短い応答

(相づち、うなずきなど)を示す、話の節目で確認のために短い質問を投げかけるといったことは、話し手との良い関係を維持し、自分自身も集中力を高めるための良い方法です。

④身体的「サイン」に気をつける。

話はもちろん「耳」で聞きますが、むしろ「全身で聞く」姿勢を持っていくものです。話し手の側も本当に聞いてもらいたい時は、口だけではなく全身がそのことに集中しているものです。逆に言えば、言葉での会話に表現されない様々な感情が、身体動作に表れてきます。「早く終わらせて遊びに行きたいなあ」とか、「この人にどこまで話して良いのかな」とか。にこやかに楽しそうに話しているのによく見ると手を固く握りしめている、といったケースさえあります。こうしたサインに気を配ることで、その人が本当に話したいこと、聞いてほしいことを引き出せる場合もあります。

(3) 解決への道

何かの問題についての相談の場合、問題となっている事柄についてもっとも多くの情報を持っているのは相談者自身です。当たり前のことですが、しばしば見落とされていることでもあります。カウンセラーはとかく「答」を見つけ出そうとしがちですが、実は

相談者自身がすでに答を用意している場合が多いのです。最初からそれを自覚している人の場合はその答を肯定してもらいたかったり評価してもらいたかったりするのですが、自分が答を出しかかっているのにそのことに気づいていない、というケースもしばしばあります。その時は、本人がそれに気づくまで聞き続けることがカウンセラーの役割になります。状況の把握や解決の可能性について適切な質問を投げかけることができれば、有効な助けとなるでしょう。

相談者が自分で答を見つけれない場合も、もちろんあります。また自分で答を見つけているけれども自信がなかったり、それが明らかでない誤りとカウンセラーの目に映ってくる場合もあります。その場合、「正解」を言ってもらいたいと思うことも多いでしょう(特に牧師には、その傾向が強いかもしれません)。けれどもその場合も、相談者が自分で見つけて納得した答でなければ心には届かない、もしくは実行に至らないものです。カウンセラーはすぐに答を出すよりも、一緒に答を求めて祈り、考えることに徹した方が良さそうです。相談者と一緒に、その時点で「わかっていること」と「わかっていないこと」を明確にする、話の内容を紙に書いてみる、状況を理解できる第三者の意見を聞く、などの手助けの方法があります。クリスチャンとして、み言葉の中に解決があること

を信じて共にみ言葉に聞くことも大事です。

3. み言葉によるカウンセリング

私たちは「聖書は誤りのない神の言であり、信仰と生活の基準です」と信じて告白しています。聖書の教えは狭い意味での「靈魂」の問題だけではなく、人生のすべての領域に関わる「神の言」だと信じています。思春期のキャンパーが直面している問題は、実に様々です。友達との関係、恋愛や性の悩み、勉強、進路、自分の性格や能力、家庭関係、等々。これらの問題にみ言葉から光を当てられ、取るべき態度が明確にされることはバイブル・キャンプの大切な目的の一つでしょう。

(1) 聖書の中に答があることを信じ、聖書の導きを 祈り求める

カウンセリングにあたっては、カウンセラー自身が聖書の中に答があることを信じていなければならぬのは当然です。ただし、強引な解釈やこじつけは禁物です。聖書が書かれた時代背景や文化は現代と遠く離れているのですから、直接適用できるケースは少ないでしょう。大切なのは、聖書の価値観や原則を正しく学んで、それを具体的な問題に適用していくことです。聖書の導

きを祈り求めながら、相談者が納得する仕方のみ言葉を解釈し、状況に適用していくようにしましょう。その際、相談者の聖書知識に配慮しましょう。できるだけ自分で適切なみ言葉を見つけ出すことが望ましいのですが、聖書の箇所を示すなど、フォローは必要です。

(2) 証しの有効性

カウンセラー自身がよく似た事例を経験している場合、自分のみ言葉に教えられた証しを伝えることも有効です。ただし、「説教」にならないよう気をつけましょう。また「100%同じ経験はない」ことも覚えておきましょう。あくまでも相談者自身が、自分の問題にみ言葉を当てはめて理解することが目標です。

(3) すぐに答が見つからない場合

特定の問題についての答が、常にみ言葉から見つかるとは限りません。その場合、「見つかるまでは」と長時間探し続けることは避けた方がよいでしょう。すぐに見つからなくても良いから「聖書を読み続けて、祈っていきましょう」と励ますようにしましょう。み言葉を読み続け、祈り続けていれば、神様もとても良い時に示してくださるものです。

(4) 「み言葉によるカウンセリング」と「個人伝道」の違い

人生の問題にみ言葉による答を見いだすことは聖書が教える「救い」の一部ですが、「救い」そのものではありません。神の言である聖書が人生の道しるべとして語り続けるためには、私たちと神様との関係が根本的に確立していることが必要です。具体的、個別の問題にとどまらず、相談者自身がより根源的な問題（罪、神との関係の破れ）に気づいてその解決を求めている場合、必要なのは救いのメッセージを個人的に適用して悔い改めと信仰告白に至らせる「個人伝道」です。

4. 個人伝道

個人伝道についてはウィルクス師の「救霊の動力」やR. A. トーラー「個人伝道法」などの優れた手引きがありますので、ご参照ください。

(1) 個人伝道の心得

①個人伝道は、救われる必要を自覚した魂のための、愛の奉仕です。強制的、脅迫的に行うことがあってはなりません（救われ

なかつたら地獄行き）など。またカウンセラーの達成感とも無関係です。

②人が救われて神の子となることは神様ご自身の願いであり、そこに聖霊が働いてくださることを認めるべきです。

③新生したクリスチャンであればだれでも、個人伝道ができます。聖霊の導きを祈り求めつつ、慎重に進めましょう。人間的方法に頼ることは危険です。

④カウンセラーと一対一の信仰告白がゴールではありません。教会での公の信仰告白（洗礼）につなげる必要があります。

(2) 救いに必要な教理とは

①神について

聖書が教える唯一の神様の存在、神様が万物の創造者であること、愛であること。クリスチャンホームの子どもであれば、知識としては知っていることですが、実践において神様を唯一絶対のお方としてきたかが問われます。ノンクリスチャンの背景から来た人であれば、まず唯一の神様の存在から教える必要があります。

②人間について

神のかたちに造られた尊い存在であること、神の愛に応答でき

る霊的存在であること。現代の若者は自分に自信が持てず、否定的な感情にとらわれている人が多いようです。罪を示す前に、まず自分が神様から見ていかに尊い存在であるかを教えらるる必要が、彼らにはあります。

③罪について

神に背を向ける根源的な罪と、具体的な罪の両面が聖書から示される必要があります。「罪意識」や「自責の念」がイコール聖書の教える罪、ではないことにも注意が必要です。律法（十戒）から何が罪であるか（罪の定義）、山上の説教から内心の罪について光を当てられることもよいでしょう。自分の罪深い性質にもみ言葉の光を当てられる必要があります（J. I. バッカー『伝道と神の主権』）。

④イエス・キリストについて

受肉した神の子、神の愛を表した方として。また十字架のあがない、復活、救い主としての権威について。教会に通っている人であれば知識としては知っていることですが、「私の救い主」として個人的に適用することが重要です。

⑤救いについて

救いの中心は「神との関係の回復」です。それは「永遠のいのち」と言い換えることもできます。そのために十字架による信じる者への罪の赦し、義認、新生の恵みがあります。

※知識として知っている人には個人的適用が、まだよく知らない人には聖書を開いて順番に教えることが必要です。キャンプでのカウンセリングの場合、大事な部分はメッセージで語られているので、それを理解できているかを確認することになります。

(3) 個人的適用のための導き

①信じることを告白するについて

心で信じることで口で告白することの両方が必要です。「信じる」とは知的同意以上のことで、教えられたメッセージに自分自身を委ねることを意味します。また「告白」には「罪の告白」と「信仰の告白」があります。「信仰の告白」については、洗礼式における公の告白が最も重要です。「罪の告白」は何よりも神様に対してなされるものですが、真実な告白を助けるためにカウンセラーの前で具体的な罪の告白をすることが必要な場合もあります。ただし、カウンセラーは秘密を厳守しなければなりません。また具体的に誰かに損害を与えた罪の場合、その相手にも告白して救いを乞う、または償いをする必要がある場合もあります。このこと自体は救い（義認）の必要条件ではありませんが、信仰生活が勝利に満ちたものとなるためにはなされた方がよいのです。

②み言葉による救いの保証について

聖書の信仰は感情ではなく、神様のみ言葉が真実だと認めることとす。新生の経験においては当然大きな喜びの感情が伴いますが、感情に救いの根拠を置く信仰は不安定です。み言葉に根拠をおいて信じ続けるように励ましと勧めが必要です。

③洗礼について

個人伝道はその場で完結するものではなく、洗礼において信仰を告白し、キリストの体に連なることが必要です。ただし、洗礼の時期や踏むべき手順についてはカウンセラーではなく所属教会の牧師の指導に従うべきです。未成年の場合は家族との関係もあり、また受洗後の信仰生活が続くようにとの配慮も必要です。カウンセラーの立場からは、牧師にできるだけ早く報告し指導を受けるように勧めることが最善でしょう。

5. カウンセリングにあたっての注意事項

(1) カウンセラーのタイプと役割。

①ファースト・カウンセラー（筆者の造語です。他に適切な呼び方があれば、お教えください）。

キャンプには、参加者より少し年長の、卒業後数年の

先輩たちがスタッフとして加わっていることも多いでしょう。彼らの多く（すべてではなく）は信仰的にも人間的にも未成熟で、カウンセラーとしての期待は持たれていなかったり、本人も「カウンセリングとか無理」と思っていたりします。しかし、思春期のキャンパーにとっては彼らの存在がきわめて重要であると考えます。自分たちに近い感覚を持ち、話しやすく、自分たちの悩みや弱さを理解して共感してくれる良き先輩。しかも数年前まではキャンパーとして参加し、カウンセリングを受けて解決を見出し、今は青年クリスチャンとして歩み、奉仕者としてキャンプに参加している彼らに、近い将来の信仰者としての自分を見ることができるところです。本格的なカウンセリングに入る前段階として、これらの先輩と気軽なコミュニケーションを持つことは、その先にあるカウンセリングへの良き導入となります。もちろんこれらの先輩たちが良き訓練を受けて本格的なキャンパー・カウンセリングに携わることができれば、キャンパーにとって理想のカウンセラーとなります。

②聖書的カウンセラー

み言葉の知識と理解に基づいて、キャンパーの抱える問題に光

を与えることができる人です。牧師やベテランのスタッフに期待される役割です。聖書の知識だけでなく人生経験や常識、バランス感覚も求められます。その一方、若いキャンパーたちの感覚から「ずれて」しまわないよう、また彼らが望まないものを自分の尺度で強いることがないように、注意と自制も必要です。

③ 専門的カウンセラー

キャンパーが解決を求める問題の中には、特別な専門的知識や経験が必要なものもあります。家庭の問題やいじめ、心の傷、進路選択の悩みなどが例としてあげられるでしょう。性に関する事柄や薬物の問題などは、今の若者の実情を知らない適切な対処ができないかもしれません。キャンプスタッフの中にこうした問題に対応できる人材がいる場合にはその人が対応することになりますが、その場に適当な専門家がいない場合は後で対応することになります。教団単位、あるいは超教派で、そうした専門家にコンタクトを取るためのネットワークがあればと願われます。

④ 個人伝道者

基本的に新生したクリスチャンは誰でも個人伝道ができますし、神様がそのように導かれる場合があります。とはいえ、魂の永遠に関わる大切な事柄ですから、備えなしに事に当たるのは、特別な導きがある場合以外は避けたいものです。教職者は神学教

育の中で個人伝道の訓練を受け、また教会での奉仕の中で何度も経験していますから、自信がなければ教職者に委ねる方が良いかもしれません。

(2) 自分が扱える問題と扱えない問題を見分け、扱えない問題については適切な人に委ねる。

特に専門的知識の必要な深刻な問題（心の傷や病、性の問題、家庭問題、金銭問題、深刻な罪など）は、不用意に扱うことでその人の人生を狂わせる危険があります。緊急避難として自分が関わらざるを得ないケースもあり得ますが、できるだけ自分の扱えない問題については他の人に委ねるといふ節度を持つておきたいものです。

(3) 相談者の望まない扱いをしない

カウンセラーが、自分の価値判断に立って「あなたはこうなるべき」とキャンパーに押しつけることは、百害あって一利なしです。強引な個人伝道や答の押しつけは逆効果になります。

(4) カウンセラー一人で完結させない。必ず教会に魂を委ねる。

日常生活から離れた場所ですべてのカウンセリングをすること

には、キャンパーがカウンセラーとの関係に依存し、所属教会よりもカウンセラー個人に結びつくようになる危険が伴います。現代はキャンプの後もメールなどで連絡を取り合うことが可能な分、その危険も増していると言えるでしょう。クリスチャンは教会に結びつけられ、教会で育てられることにより個人的信仰の偏りから守られます。キャンプが終われば魂の養いは所属教会に委ねるべきです。もちろん、主にある兄弟姉妹としての対等の交わりを持っていけるなら、それは望ましいことです。

(5) 秘密は厳守する

キャンプでのカウンセラーは職業ではありませんが、道義上の守秘義務を負っていると考えるべきです。相談したことを誰かに話される可能性があったら、決して真剣な相談は成立しないでしょう。ただし、カウンセラーだけでは抱えきれない秘密、というものも存在します。教会で養われるべき魂が所属教会の外にしか相談相手を持たない、という状態も望ましいものではありません。ですから、相談を受けた事柄についてはできるだけ早く所属教会の牧師にも話すよう、キャンパーに勧めの方がよいでしょう。どうしても牧師に伝える必要があると判断したら、「あなたの牧師にだけは伝えておきます」と相談者に断った上で伝えるようにし

ます。牧師には職業上の守秘義務があるので、秘密にしておくことを前提で報告することが望ましいのです。

ただし、牧師の子どもにとっては「牧師に報告する」「イコール」親に報告する」となります。これについては「絶対イヤ」となる場合がほとんどでしょう（私も十代の時はそうでした）。本人とよく相談した上で、「親ではなく牧師と割り切って報告する」か、「教会の信頼できる先輩クリスチャンに相談を引き継ぎ、牧師にはその人に知らせたことを報告する」という方法がよいかと思えます。

(6) 弱さに寄り添う

「傷ついた葦を折ることなく、ほの暗い灯心を消すことなく、真実をもつて道を示す」。理想的なカウンセラーである主イエスさまは、そのようなお方でした。真実を示すことは時につらく、苦しいことです。だからこそ、その真実を受け止めることができるよう、相談者の「弱さ」に寄り添い、支えることがカウンセラーには求められるのです。「今の若者は弱い」。その通りです。その弱い若者たちを主は愛し、養い、主のわざを担う器として召し出そうとしてくださいます。最高のカウンセラーである主に信頼しつつ、主が出会わせてくださる若者たちに仕えさせていただきます。

聖書 使徒16・25〜34 テーマ 信仰による救い

序論

(金井信生)

ピリピの町で投獄されてしまったパウロとシラスですが、獄の中でもイエスに対する信仰を失わないで信頼している二人によって、獄吏一家に救いもたらされました。

一、救われている人

大地震のあと、獄吏は、囚人たちが逃げてしまったと思いきみ、責任を取って自害しようとしたが、パウロの「われわれは皆ひとり残らず、ここにいます」との言葉にとどめられました。看守は、パウロのもとに来て、ひれ伏し、救いを求めました。それは、鎖につながれてなお、神を賛美し、祈っていたパウロとシラスは、自分とは違う「救われている人」だということに気づいたからです。

獄で鎖につながれたパウロとシラスは、夜中でも賛美の歌を歌い、神に祈っていました。獄からの解放を求めて祈っていたのではありません。私の信じる神は私を助

けることができます。でも今この状況で助けてくださらなかったとしても、私は神を賛美しますと、既に救われている感謝によって賛美していました。

聖書がいう救いとは、物事が自分の願ったように進み、与えられるということではありません。魂が救われて永遠の命を得、心に希望と平安がある者に変えられるということです。もちろん、救われてからも、恐れや迷いが生じることもあります。ピリピに至るまでのパウロの歩みにも、同労者と意見が食い違って激しく議論したこともあり、また進むべき道がわからなくなって困ったこともありました。ようやく導きを得て来たピリピでは、獄につながれています。

神の導きと信じつつ、思いがけない困難に出会っても、神を賛美し、なお感謝し、信頼できるのは、魂の救いを得ているからです。体は鎖に縛られていても、その心は自由に神に向かい、交わっている、これが救われている人の幸いです。むしろ、自由なはずの獄吏のほうが、仕事のことや家族のことなど、いろいろなことで思い悩むことが多く、体は自由に見えても、心はつながれていないのです。

二、救われるために

獄吏の（先生がた（キユリオス）との問いかけに、パウロとシラスは（主（キユリオス）イエスを信じなさい）と答えます。

救われるためにしなければならないことは、善い行いでも、献げ物でもなく、イエスを主と信じていることです。イエスキリストが私のために十字架についてくださり、私に代わって罪の罰を受けてくださったと信じていることです。それはイエス・キリストの十字架の死に、罪と死に縛られ苦しめられている私たちへの、神の愛と赦（ゆる）しの恵みが現れているからです。

パウロとシラスは、すでに主イエスを信じています。そして獄も鎖も妨げることのできない、罪赦された喜びを、また永遠の命への確信と希望を、賛美に表していました。さらに主は、信じて救われた者を用いて、その周囲にも救いを広げていかれます

三、救いの広がり

パウロとシラスだけでなく、他の囚人たちも獄から出て行きませんでした。囚人たちはそれまで獄から解放されることを願っていましたが、パウロたちを通して、もっ

と大事な救いがあることに心が向けられていたからです。

またパウロたちは獄吏のためにもとどまりました。当時は、囚人が脱走したら獄吏が代わってその刑を受けなければならぬきまりでした。「自分たちが逃げ出したら、この獄吏はどうなるのだろうか」。パウロは自分を救うことよりも、この獄吏が罰せられないために、また鎖につながれるかもしれない道を選びました。それは、主イエスが全人類の救いのために、あえてご自分を救おうとされなかった、その恵みによって救われていることをおぼえ、感謝しているからです。

結論

自分の周りが変わらず困難な状態にあっても、主イエスを信じるなら、神様に愛され、守り導かれている確信を得ることができ、まず自分自身が変えられていきます。そして、神様から愛されているように人を愛し、赦されたいように赦していく時に、主の救いを受ける人が周囲に必ず起こされていき、共に神様を賛美し、喜ぶ幸いに導かれます。主イエスを信じましょう。

研究資料

(宮澤清志)

さて、今週の聖書箇所は使徒16・25～34であるが、前後の箇所と切り離してここだけを語ることはできない。直接的には16～40に描かれている出来事である。また先週の「マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい」という幻によってピリピへとたどり着いたパウロ一行の物語であることを考えると、先週の続きである11節以降の言葉を頭に入れつつ御言葉を語る必要がある。

テキスト

25～26 度重なるむち打ちと足かせ(23～24)は、ふたりを苦痛のどん底に追い込んだであろうが、それにもかかわらず、彼らは祈りつつ、主にさんびを歌い続けていた。この時、パウロとシラスとは獄屋の最も奥の部屋にいた(24)。一方、ほかの囚人たちは彼らのさんびに聞き入っていた。この2人の姿は囚人たちを感動させたに違いない。そのようなとき、**突**然、**大地震が起こった**(26)た。多くの注解者は、この地震をパウロたちの祈りに対する神の応答と見る。

27 物語の焦点は、パウロからひとりの獄吏へと転換する。獄吏の務めは、囚人たちが逃亡しないように見張ることだっ

た。彼は、ローマの軍人として、その義務に対する責任を当局から植え付けられていたことであろう。地震によって床から飛び起きた獄吏は、その責任感から真っ先に囚人の様子を見に行ったのであろう。ところが目にしたものは開け放たれた獄屋の扉であった。最悪の事態を直感し、直ちに責任をとろうとして自害を企てた。というのは、ローマ法によると、囚人の脱獄を許した看守は、その囚人に課せられていたのと同じ刑に服することになっていたからである。

28 ところが、獄吏はパウロの声によってその行為を遮られることになる。ある注解者は、囚人全員がそこにいることを、灯りがない中でどのようにして知ることができたのか、あるいは獄吏は自害しようとしていることをどのようにして知ることができたのか、等様々な疑問を呈している。しかし、そのようなことは聖書の本筋からははずれたことであり、彼の部下が持っていたであろうたいまつ(29)のほのかな灯りによっておぼろげながら見ることができた可能性もあることも含めて考える必要がある。**われわれは皆ひとり残らず、ここに**いる。このことはこの看守を驚愕させた。獄屋の中には、パウロとシラスだけではなく、囚人たちが皆逃亡しないで残っていたのである。看守は、自分の経験では理解しがたい出来

事が目の前で起こった事に驚き、次節以降へと展開する。

30 救われるために、何をすべきでしょうか 大地震という出来事と、2人の従前よりの評判、また囚人たちがひとり残らず逃げることはなかったという事実とが結びつき、看守は2人を神の代理人、また魔術師とでも思いこんだのであろう。獄吏の求める「救い」が何からの「救い」かは定かではないが、おそらくはこの出来事を通して彼らの伝える神を受け入れないわけにはいかないと思つたのであろう。獄吏の真剣な求めを感じる。

31 主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます パウロとシラスは、人がどうすれば救われるかについて、当時の初期キリスト教の信仰告白を反映させ「主イエスを信じる」ことによる、と答えたのであろう。すなわち、イエスを主として信頼し、この方を主と受け入れて自らをささげる必要があるということを語るののである。私たちが常に、そして繰り返し立ち返るべき事は、イエスこそ私の人生の主であるという信仰の告白である。この信仰に立つとき、人は救われる。しかも、このことは自らが救われる道であるばかりでなく、自らの家族も同様に救われる道であることを説く。聖書は家族の大切さ、一体性を強調し、家族

全員が救われ、あるいは同じ神を信じることは、当然のことであるとされている(16・15、ヨシユア24・15等)。

32 救われるためには、イエスを主と信じると同時にそのお方を知ることもまた必要なことである。獄吏やその家族に対して2人はキリスト教の教えを語って聞かせた。**神の言** 福音の音のことである。

33 クリユストモスという古代の名説教家は、「彼は洗つてやり、洗ってもらった。彼はふたりの打ち傷を洗つてやり、自分の罪を洗ってもらった」と語っている。獄吏はふたりを家へとつれてくる前に、おそらく獄内の中庭の井戸で、ふたりの傷ついた身体を洗い、同時にそこで彼の家族共々洗礼を受けたのではないだろうか。なお、家族の受洗は、使徒では他に10・44、16・15にも述べられている。

34 自分の家 刑務所の房の上階にあったのかも知れない。**食事** 喜びの結果としての主の晩餐を意図しての食事であろうし、またキリスト者としての交わりの愛餐の意味をもつ食事であろう。またこの食事は主の聖餐を囲んだのかもしれない。**心から喜んだ** おどりがあって喜ぶ、の意味。

参考図書 I・ハワード・マーシャル「ティンデル聖書注解使徒の働き」(いのちのことば社) 他

聖書

使徒16・25〜34

タイトル

信仰による救い

暗唱聖句

主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。

使徒16・31

目標

主イエスを信じて、救いを頂く者となる。

導入

(水野晶子)

先週、パウロさんとシラスさんは「マケドニアに渡って来て、私たちを助けて！」との幻に、神様に呼ばれていると信じて、マケドニアに渡り、ピリピという町で、イエス様のお話をして伝道しました。するとイエス様を信じて救われる人がおきてきたのです。ところが、パウロさんとシラスさんのことを悪く思う人が、うそを言って訴えたので二人は牢屋に入れられてしまいました。「えっ? どうして? なんで?」って思ってしまうよね。みんなだつたらこんなときどうするかな? 「怒る?」「当たり前散らす?」「泣く?」「叫ぶ?」パウロさんとシラスさんは牢屋でどうしたでしょう。

救われている人

パウロさんとシラスさんは、奥の方の牢屋に入れられ、重

い鎖で足かせが付けられ逃げられないようにされています。まるで凶悪犯みたいですね。鞭で打たれた傷だつて痛いでしょう。ところが、そんな二人は、神様を讃える賛美を歌い、神様に祈っていました。「神様、早くここから出してください」とだけ祈ったわけではありません。もちろん神様は助け出すことがお出来になる方だと信じていました。でも、今、助け出されなかったとしても、神様に救われていることを感謝して、祈り、賛美していたのです。一緒に牢屋にいる囚人たちも、牢屋では聞いたこともない歌や祈りの声に、じっと耳を傾けていました。

その時です。がた、がたがたがた、ドーン、ぐらつ、ぐらぐら、大きな音、激しい揺れで牢屋の頑丈な扉もあいてしまいました。「地震だ!」「大変だ!」駆け付けた牢屋番は「もうだめだ、みんな逃げてしまった、死んで責任を取るしかない」と思いこんで、自害しようと思いました。パウロさんは「私たちはみんなここにいるから大丈夫、心配しなくていいよ」と牢屋番が自害するのをとどめました。囚人たちもパウロさんとシラスさんの賛美と祈りに、この人たちは神様に救われている人に違いないと逃げなかったのです。囚人たちが逃げなかったことにびっくりして、牢屋番は牢屋の中に駆け込んで

きました。そして、パウロさんとシラスさんの前にひれ伏して、「先生がた！ 救われるために何をすべきですか？」と聞きました。さあ、どうでしょう。救われるためには何かしなければなりませんか？

救われるために

パウロさんとシラスさんは「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」と答えました。ぜひ救われたいと願った牢屋番はすぐ二人を家に連れて行き、家族みんなに、救われるために主イエスを信じることを話しました。牢屋番も家族も主イエスを信じバプテスマを受けて、神様を信じて救われたことを心から喜びました。

救われるために、私たちが自分で頑張って神様に喜ばれる良いことをしようと努力するのではなく、イエス様が私のために十字架にかかって死んでくださった救い主だと信じることです。ただイエス様を信じるだけでいいのです。パウロさんとシラスさんは鎖でつながれていても、救われているから心は自由でした。賛美し、祈る二人は、囚人たちにこの人たちは何か違うと感じさせ、牢屋から逃げずに留まりました。この事によってさらに多くの人に救いが届けられていきました。

救いの恵み

向井繁樹君は右足腫瘍という病気になる入院しました。この病気は足がはれ、そのうえ腐るといふ恐ろしいものです。ある時、クリスチャンのおじさんが見舞いに来て、イエス様の救いについて話してくれました。繁樹君は素直にイエス様を救い主と信じました。病気はどんどん悪くなるばかりです。でも繁樹君は、お見舞いに来る人たちに、一生懸命イエス様のお話をしました。

救われて半年過ぎたある日、繁樹君はお父さんお母さんに、「ぼくは病気で苦しんでいるけど、もうすぐ、み使いが来て、涙も死も苦しみもない天国へ連れて行ってくれるよ」と、小声でいいました。繁樹君はその日のうちに召されました。繁樹君の死をも恐れない信仰をみて、やがて両親も救われました。（キリスト教例話集より）

主イエスを信じるなら、神様から愛され、守られていることを確信し、周りの人にも救いの恵みが届けられます。主イエスを信じましょう。

♪ どうしてかわかるかな ♪ （ふくいん子どもさんびか4）

聖書 黙示録21・22と22・5 テーマ 聖なる都

序論

(金井信生)

イエスを主と信じ、救われた者が目指すのは、神と共に住む聖なる都です。黙示録の最後に記される都を学び、今主と共に歩む信仰の生涯が、そのまま結びついていることをおぼえます。

一、聖所である都

〈この都の中には聖所を見なかった〉のは、〈神と小羊とが、その聖所なのである〉からです。もはや人が神を探し求めたり、犠牲を携えて近づぐ必要がなく、神と人が一つ所にいるからです。

もともと、人は神と共に住み、交わりを持つ存在として造られました。しかしエデンの園から追放されて以来、神を探し求めてきました。神はイスラエルの民に自身を啓示され、神の民にとって「あなたの祭壇のかたわらにわがすまいを得させてください。あなたの家に住み、常にあなたをほめたたえる人はさいわいです」(詩84・3〜4)と、神に近く住むことが最高の願いでした。

ここに、主イエスを救い主と信じ、〈小羊の命の書に名を記されている者〉に永遠の住まいが約束されています。この都は神の栄光が満ちているので、太陽や月の光も必要がありません。また夜がないので、門が閉ざされることもありません。ただし、キリストによる罪の赦しを受けず、罪を犯し続ける者はひとりも入ることができません。

永遠の都は世の終わりに実現する者ですが、すでにキリストの救いを受けている者にとっては、ある日突然移されるものではありません。「わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう』」(Ⅱコリント6・16)と告げられているように、救われてからやがて永遠の都に入る時まで、神が共にいてくださり、世の光であるキリストが常に導いてくださっています。

二、いのちの水の川・いのちの木

聖なる都には〈いのちの水の川〉が流れ、〈川の両側にはいのちの木が〉生えています。いのちの水の川といのちの木も、エデンの園にあったものです。ただ、アダムとエバが神の言葉に従わなかったために、失われていた

ものです。

いのちの水は（神と小羊との御座から出て）おり、人を生かす命にあふれています。また命の木の豊かな実はこの心に彩りや味わいを与えます。またその葉はいやす力があり、病も死も永遠の都には入り込むことはありません。

この恵みも、キリストを信じ従う者には、この世においてすでに与えられています。詩篇1篇には、主の言葉を喜び従う者が「流れのほとりに植えられた木」のように栄えることが歌われています。

またイエスは「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」（ヨハネ4・14）と約束されました。

三、礼拝の民

聖なる都に迎えられたのは礼拝の民です。これまで神の臨在に触れた者はあっても、（御顔を仰ぎ見る）ことの許された者はいませんでした。しかし、ここでは主を「顔」と顔とを合わせて」（1コリント13・12）礼拝するのです。この礼拝者たち、すなわちキリストの救いを受けてい

る者たちは、天にあるいのちの書に名が記されているだけでなく、その人自身に御名が記されています。ですからクリスチャンと呼ばれる者は「この名によって神をあがめなさい」（1ペテロ4・16）と命じられているのです。

黙示録ではこれまで地上に起こる終末の混乱や悲慘と、天上の礼拝の姿とをそれぞれに見てきました。しかし、最後はすべての罪と悪は滅ぼされて、永遠の聖なる都と礼拝の民だけが残ります。

私たちはなおこの地上で、試練や誘惑の多い中を歩んでいきますが、礼拝に集うことが大きな恵みとして与えられています。地上での礼拝は不完全なところもありますが、天上の礼拝者と心を合わせて生ける主を仰ぎ、やがて永遠の御国での礼拝にそのまま迎えられるべく深遠さがあります。主日の礼拝、家庭礼拝、個人のデボーションは御国の民である証しであり、永遠の都につながる確信と希望を得る時です。

結論

救い主イエス・キリストを信じて、永遠の都に望みをおき、天に国籍を持つ礼拝の民として信仰の生涯を歩みましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

黙示録は幻や数字による象徴表現を多用しており、読手の想像力に解釈が委ねられてきた面がある。しかし近年、死海文書をはじめとする同時代の諸文献の研究によってそれらの象徴が意味する内容の多くが明らかにされており、それを踏まえた注解書や黙示録全体の思想・神学に関する研究書が刊行されている。日本語で読める本としては岡山『小羊の王国』とボウカム『ヨハネ黙示録の神学』が特に優れている。最初にこれらの書の総論(第一章)を読んで、黙示録全体のメッセージを把握しておかれることをお勧めする。

黙示録の執筆目的は、迫害の中にある信者がこの世と妥協せずに戦い抜くよう励ますことであり、そのために神とキリストの究極的な主権が宣言され、戦い抜いた勝利者への栄誉と来るべき新天新地のすばらしさが描き出されている。本日の箇所はその新天新地の中心、神とキリストが支配する都「新しいエルサレム」の描写である。

テキスト

21・22 全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所 黙示録の描く終末には、旧約のメシア預言の成就(神の民イサラエルの回復)と、新約において初めて啓示された神の御子・小羊イエス・キリストの王国という両面がある。終末におけるエルサレムの回復はイザヤ(52・1)、エゼキエル(40章以下)等の見た幻でもあったが、聖所(神殿)が存在しない聖都は彼らの理解を超えていた。神殿は神の臨在を象徴し、神を礼拝するための場所であるが、新しいエルサレムには主なる神と御子イエス・キリストが臨在しておられるため、聖所は必要ない。十字架によって神と人との隔ての壁が取り去られた結果、「顔と顔を合わせて」神を見ることができるようになる(Ⅰコリント13・12、Ⅱコリント3・18)。神との隔てなき交わりこそが、救いの完成なのである。

23 日や月がそれを照す必要がない この表現は22・5でも繰り返され、強調されている。神の臨在は光そのものであり、他の光を必要としない(イザヤ60・19〜20)。そこでは「闇」に象徴されるすべての苦悩も存在しないのである(21・3〜4)。

24 諸国民は…地の王たちは… 新しいエルサレムでは、神の民に加えられた諸国民が登場する。終末のメシア王国が諸国民を支配するとの思想は旧約にも見られるが（イザヤ60・4～11）、ここでは異邦人もキリストにあって神の民、新しいイスラエルとされている（イザヤ60・3、ヨハネ10・16、エペソ2・14～19）。旧約のメシア預言に見られたイスラエル中心の神の国ではなく、イスラエルを長子として全人類が招かれている神の国の幻である。

25 都の門は、終日、閉ざされることはない 直接には「夜がない」ことが理由であるが、都が諸国民に対して文字通り「開かれている」ことの表現でもある（26、イザヤ60・11参照）。

27 小羊のいのちの書に名をしるされている者だけ 全人類が招かれている神の国の広さ（普遍性）と同時に、汚れた者は入れないというその聖さ（排他性）も示されている。終わりの日に全人類・全被造物が救われるという聖書の福音は普遍的な救いのメッセージであるが、普遍救済主義（信じてなくても救われる）ではない。黙示録が繰り返す、この世との妥協や背教を戒めていることも思い合わせる必要がある。
22・1～2 いのちの水の川、いのちの木 エゼキエル47

章の預言の成就であるが、創世記2章のエデンの園の回復というメッセージも強調されている。新天新地・新しいエルサレムが創造の目的の回復であることを教えている。最初の状態への復帰ではなく、さらに良い天地への更新である。諸国民をいやす いのちの木の祝福が全ての人に開かれていることを示す。民族による差別のない、キリストにある真の平和の確立である。

3～4 彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見る 神の民は神との隔てのない交わり（礼拝）に招かれている。

5 彼らは世々限りなく支配する 「支配」は王としての支配を表す単語である。キリストの王国の民とされた人は、その王権の地上における代理者として生きる。創造における「地の支配」（創世記1・26）という人間本来の使命の回復である。

参考図書 岡山英雄『小羊の王国』、R・ボウカム『ヨハネ黙示録の神学』、L・モリス（ティンデル）、G.E.Ladd, *The Last Things*, Ladd, *A Commentary on The Revelation of John*, G. K. Beale (New International Greek Testament Commentary), G. R. Osborne (Baker Exegetical Commentary), D. E. Aune (Word)。

聖書 黙示録21・22と22・5

タイトル すばらしい天国

暗唱聖句 神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあ

かりだからである。 黙示録21・23

目標 キリストを信じて永遠の都に入る者となる。

導入

(松浦みち子)

皆さんは、天国ってどんなところかなあ、と考えたことありますか？ ある時こんなお話を聞きましたよ。ある人が二つの部屋を見学しました。それぞれの部屋には同じように素晴らしいご馳走が並べられています。ひとつの部屋の人たちは顔色も悪くイライラと互いにいがみあっています。もう一方の部屋の人たちは顔色もよく、ニコニコと楽しそうにしています。どうしたのでしょうか。それぞれの部屋には、1メートルもあるフォークとスプーンしかありません。イライラの人たちは一生懸命食べようとするのですが、自分の口に食べ物を入れることができません。一方、ニコニコの人たちは自分の口に食べ物を運ぶのではなく、相手に食べさせてあげるのです。また自分も相手から食べ物を入れてもらおうので

す。天国は、自分が自分ごと「我」を張るところではなく、相手を思いやって生きるところなのですね。

それでは喜びと楽しみが満ち溢れた天国の秘密を聖書から学びましょう。

ヨハネ黙示録

聖書の最後の書はヨハネ黙示録と言います。イエス様の弟子ヨハネがパトモス島という所で過ごしている時、神様が天国の様子を見せてくださったのです。ヨハネは随分年をとっていましたが、「見たことをきちんと言っておきなさい」と言われたように、神様が見せられたことを間違えないよう気をつけて書きました。ヨハネが見た光景は、今まで誰も見たことがない素晴らしいものでした。それとともにヨハネはイエス様との最後のお食事の時の約束を思い出していました。「あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」(ヨハネ14・2と3)。ああ、そうだったんだ。イエス様の約束はこのことだったんだと思いました。

新しい天と新しい地

ヨハネは何を見たのでしょうか。今私たちが生きている世界

7月

14日 礼拝メッセージ例

の天と地は過ぎ去って、全く新しい天と地を見ました。そして、聖なる都エルサレムが天から下ってくるのを見ました。ヨハネが見た天の都の光景は口で言い表せないほど素晴らしいものでした。この天の都はきらきら光り輝く美しい宝石で飾られた城壁で囲まれ、土台にも宝石が散りばめられています。都の大通りはすきとおったガラスのような純金できていました。また、都の大通りの中央を流れる「いのちの水の川」は、水晶のようにきらきら輝いていました。その川の両側には、いのちの木があつて、いろいろの実を結び、その実は毎月実つて、青々とした木の葉は人々を癒します。もう、柿泥棒もりんご泥棒もいないのです。だれでも、いつでも好きな時に、自由に食べる事ができるのです。あー、何て素敵なおところでしょう。また、この都には神様を礼拝する聖所はありません。神さまご自身とイエス様がいつもそこにおられるからです。太陽も月も夜もあります。神様の栄光が都を照らしているのでまぶしいほど明るく輝いています。イエス様が一緒にいてくださるので苦しいこと、いやなこと、悲しいこともありません。みんな仲良くイエス様の周りに集まって賛美し喜び楽しく過ごすのです。そんな素晴らしい天国に入れていただきたいですね。

小羊のいのちの書

天国には夜がなく、いつでも入れるように門は閉じられることがありません。いつもイエス様がみんなの来るのを待っていていらつしやいます。では、誰がこのすばらしい天国に入れるでしょうか？ 小羊のいのちの書に名を記された人だけです。つまり、イエス様の十字架を信じ罪ゆるされた者だけなのです。あなたは、自分の名前がいのちの書に書いてあると思いますか。よくわからないと思う人、はいっ、ときつぱり返事ができる人、いろいろだと思えますが、一人残らずイエス様を救い主と信じ天国に入れていただきましょう。

わたしたちはいつ家族や友達にさよならをしなければならぬ時が来るかも知れません。でもいのちの書に名前が記されているなら大丈夫。イエス様のおられる天国で永遠に生きることができるようです。名古屋在住の涼太くんは脳腫瘍のため18才で天に召されました。イエス様を信じていた彼は、痛み、苦しみから解放されて、召されたときの顔は、平安に満ち、微笑んでいました。イエス様を信じることはなんと素晴らしい恵みでしょう。

♪まもなくあなたの♪

(ふくいん子どもさんびか57)

聖書 列王上17・1～16 テーマ 生きて働かれる神

序論

(高橋頼男)

預言者エリヤはイスラエルの王アハブに言います。(わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます)。エリヤのように私たちも、生きて働かれる神を知り、大胆に告白する者となりましょう。

一、祈りに答えられる神(一)

(イスラエルの神、主は生きておられます)。このことばは、エリヤの生き生きとした信仰を言い表わしています。しかし、このことばはだれでも言うことができる敬虔なことばでもあります。生きておられる神をその実質をもって知り、生活の中で生き生きと告白する者でありたいものです。それは、私たちの祈りを通し、祈りに答えられる神を経験することから来ます。その時、私たちはこの言葉を生きた信仰の言葉として大胆に告白することができます。

エリヤは、偶像礼拝が国を覆い、イスラエルが主にそむいて御名を汚している現状を憂い、激しく泣いて祈りました。

そして、ついに一つの確信を得ます。申命記11・16～17にある神のみことばがなされる以外に、イスラエルが主に立ち返る道はないことを知りました。そして、アハブの前に立ち(わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう)と宣言したのです。

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった」(ヤコブ5・17)。信仰は主義・主張や願望ではありません。神との生きた関係であり、祈りを通してのリアルな神経験です。

二、訓練される神(三)

神は、エリヤに「身を隠す」よう命じられました。「身を隠すことを学ぶ人だけが、神の権威をもって人の前に現れることができる。…また、その所こそ、神の人がさらにまさる奉仕のために備えられる場所である」(沢村五郎『聖書人物伝』)。

神がエリヤを訓練するため、最初に選ばれた場所は、ヨルダンの東にあるケリテ川のほとりです。その訓練の目的は、神への完全な信頼と服従です。訓練の中心は、ケリテ川の水とからすによって養われることを通し、どんな状況や環境の中にあっても、神と神のことばに信頼して、そこに留まり続

けることでした。ケリテ川の水は、日々に枯れていきまます。もはや、あと一すくいの水を残して枯れ果ててしまうところまで来ました。しかし、エリヤは、神のことばに信頼して静かに留まり続けました。決して、自分で自分を救うために立ちあがることをしません。まさに水が完全に枯れ果てたその時、主はエリヤに声をかけられました。(立ってシドンに属するザレパテへ行つて、そこに住みなさい。わたしはそのところのやめめに命じてあなたを養わせよう)。主の訓練の第二ステージが備えられていました。

「不信仰は、神と自分との間に事情を置く。そのため雲を隔てて月を仰ぐように、神を拝することが出来ない。しかし、信仰は、事情と自分との間に神を置く。それゆえどんな事情環境の中にあつてもなお、泰然としていることができる。エリヤは、ただ主の御手に支えられていた」(沢村五郎・前掲書)。

三、養われる神(4・6)

ヨルダンの東にあるケリテ川の場所は今日明らかではありません。当時も人里離れたところであつたでしょう。だれでも、住みなれたところから離れ、寂しい場所に行くことには不安があります。どのようにして生きていくのか、どうして食べていったらよいのか、全く当てがありません。もしエリ

ヤに少しの躊躇があつたとしても、不思議ではありません。その時、神様は(わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう)と約束されました。しかし、どうでしょうか。いくら、神様のおことばでも、果たしてからすの養いに身を委ねることなど出来るでしょうか。しかし、エリヤは、神のことばに従いました。それは、エリヤを養うのはからすではなく、(ザレパテのやめめでもなく)そこに遣わされる神であり、自分が告白する生きて働かれる神であると信じたからです。

長く関西聖書神学校の学監、校長代行として勤められた向後昇太郎先生は、「伝道者」でした。戦前、戦中、戦後と日本の一番厳しい時代に、ただ生ける神だけを当てるに福音を携え、大阪府下、奈良の山村僻地まで先生の歩かなかつた地はないと言われます。その先生の座右の銘は、(かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかつた)でした。

結論

祈りを通して生きておられる神を知り、その神の訓練を受け、生きて働かれる神はまた養いの神であることを知って全き信頼、徹底した服従、思い切つた献身の生涯を主にささげましょう。

研究資料

(中島啓一)

預言者エリヤが登場するこの章は、冒頭の宣言(1)と、続く三つのエピソード、すなわち、①荒野で養われるエリヤ(2～7)、②粉と油の奇跡(8～16)、③やもめの息子の復活(17～24)、とから成るが、それらのつながりに目を留めて理解することが必要である。例えば、干ばつを宣言したことがエリヤの荒野行きの必要性を生み、ケリテ川が枯れたことが彼をザレパテへと向かわせる。干ばつはまた食物の不足につながり、それが粉と油の奇跡の前提を生むのである。もちろんそれらのことは偶然の成り行きでそうなのではない。「主の言葉」(2、8)がエリヤの行動を決定づけ、さらにはエリヤを養うからすややもめさえも(彼らが意識しているかどうかは別として)主の命令に基づいて行動するのである(4、9)。

これら三つのエピソードに共通する問題は死であり、その解決は命である。その答を与えることができるのは「生きておられ」る神(1)以外にない。そのことを、命のない偶像に より頼む王や国民に判らせるために、この三年間の干ばつの期間は必要であった。またそれはエリヤの訓練期間でもあつ

た。すなわち、この三つの出来事を通して、エリヤの姿勢は受動から能動へと移っていく。最初は単純に従い、養いを受けるだけであつたが、最後は、率先して神に聞かれる祈りをささげたのである。「今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました」(24)とのやもめの告白は、彼が今や攻撃に転じ、バアルとの公の対決に向かう準備が整ったことを知らせる合図と言える。その中で、ケリテ川からすの養いを受ける従順は、決して次元の低い初歩ではなく、すべての基本となる大切な信仰の土台であつたのである。

テキスト

1 テシベびとエリヤ テシベの位置は不詳。エリヤという名は「主(ヤ)はわたしの神(エリ)」の意で、まさに彼の使命を象徴的に表している。アハブ アハブと妻イゼベルの方針は、バアルを「主」に取って代わるイスラエル国家の神とすることであつた。バアルとは、フェニキヤに由来し、カナン人も崇拜した偶像で、稲妻と雨の神、そして大地に豊穡ほむじょうをもたらす神とされていた。イスラエルの神 「アハブは彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にまさつてイスラエルの神、主を怒らせることを行つた」(16・33)。彼はイスラエルの

王であるにもかかわらず、イスラエルの神、主を、自分の神としなかったのである。主は生きておられます。主なる神は「生ける神」であり、ご自身の民の必要に応えてくださるという点において、他のすべての「命なき」神々と根本的に異なる。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう。降雨と豊穰は言わばバアルの専門分野であり、この宣言は、バアルへの挑戦でもあった。雨が何年も降らないことは普通ありえないことで、偶然を頼みとするならば、バアルが圧倒的に有利であった。だからこそ、かえって、もしこの宣言どおりになるならば、主こそ神であることがはっきりと示される。19章における有名な対決は、この時すでに始まっていたのである。

3 ケリテ川 正確な場所は不明。川の種類はワジ（雨期の（み水が流れる谷）。荒野での（鳥による）養い）は出エジプトの出来事を想起させる（出エジプト16・13）。身を隠しなさい。エリヤを敵の手あるいは飢きんから守るためであろう。

4 その川の水を飲みなさい 他の川が干上る中で、真つ先に干上るはずのワジに水が満ちていることは本来あり得ないことで、生ける神の力の表れであった。からす ワジのような荒れた岩場に巣を作り、余分な食物を貯える習性がある。

る。

7 しばらくしてその川はかれた 力及ばずということではもちろんなく、計画が次の段階に進むためであった。そしてエリヤはバアルの本拠地とも呼べるフェニキヤに乗り込んでいくのである。

12-16 わたしにはパンはありません。イスラエルへのさばきは異邦の地にも大打撃を与えたが、同時に恵みの御手は異邦の女性にも伸ばされた。しかし、それでわたしのために小さいパンを、一つ作って持つてきなさい。自然界（からす）を通してエリヤを養った主は、物質（粉と油）をも自在に支配して、救いを実現される。主に信頼するならば、イスラエル・異邦人の区別無く誰でも主の祝福にあずかることができる。その信頼の応答に向けて、エリヤはやもめを励ましたのである。『かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない』とイスラエルの神、主が言われるからです。すべての根拠は人のわざではなく、主の言葉にある。

参考図書 注解書 S. J. De Vries (Word), R. Nelson (Interpretation), 服部嘉明（新聖書注解 旧約2）。その他 The IVP Bible Background Commentary: OT

聖書

列王上17・1～16

タイトル
暗唱聖句

仕えよう！ 生きておられる主に！
わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。

目 標

列王上17・1
生きて働かれる神を信じて、神に仕える者となる。

導入

(和田 治)

皆さんは聖書の神様、この世界を造られた主なる神様について、教会学校で学んできましたよね。じゃあ、もしお友だちから、「聖書に書かれてる神様って生きてるの？ 生きてないの？」って尋ねられたら、どう答えますか？ 今日、「私の仕えている主は生きておられます」とはっきり言うことができたら、エリヤに注目しますよ！

主なる神様は生きておられる

「え〜っへん！ これからはこの国の神様はバアルじゃ！ 皆、バアルを神として拜むのじゃ。主なる神など神ではないわ！」大変です。アハブという悪い王様が奥さんのイゼベルと一緒に、バアルという偽の神を拜むようにイスラエルの人たちに命令したのです。みんな、石や木でできた、命のない神を拜

むようになりました。もちろん、主なる神様はお怒りです！
そこで、エリヤが預言者として遣わされ、言いました。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます！」

そうです。人間が考えて造ったような、命のない偽物の神とはわけが違います。バアルを拜んでいる人々は、バアルが雨を降らせてくれている、と信じていました。まっさか〜！ 雨も太陽も、植物も、この世界のすべては、造り主でいらつしやるまことの神様がお与えくださっているのですよ。生きておられる主なる神様だけが、雨を降らせ、また、命を与え、命をお育てくださるのです。

主なる神様は祈りに答えてくださる

エリヤの心には、昔モーセを通してイスラエルの民に語られた主なる神様の言葉が迫ってきていました。「もし偽の神を拜んだら、主はあなたがたに向かってお怒りになり、天を閉ざされるでしょう。雨は降らなくなってしまうです…。エリヤは祈りました。「主なる神様、どうかあなたが生きて働いておられることを、人々に分からせてください。雨をとどめてください。そしてイスラエルの民に気づかせてください、あなたこそ生きて働かれるまことの神様であられることを！」そして、エリヤはアハブ王にきっぱりとこう言ったのです。「私が何かを言わ

ない限り、ここ数年、一滴の雨も降らず、露も降りません！」
 もし、雨が降ってきたら、「やっぱりバアルこそ本物の神様だ」と思われてしまいます。でも、主なる神様はエリヤの祈りにお答えくださり、それからびたつと雨が降らなくなったのです！
 ヤコブ5・17にはこう書かれています。「エリヤは、わたしたちと同じ人間であつたが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかつた」。エリヤも私たちと同じ人間！ 私たちが信じてお祈りすれば、神様は答えてくださるんですよ！

主なる神様は養つてくださる

やがて主はエリヤにおっしゃいました。「ここを離れ、東の方に行き、ケリテ川のほとりに隠れなさい。そしてその川の水を飲みなさい。わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」。誰だつて「からす」？ からすになんてまかせられないよ…」って思いますよね。でも、エリヤは、主なる神様のおっしゃるとおりにしました。「生きておられる神様なら、からすを使つてでも、わたしを養つてくださるに違いない！」と信じただからです。そして、なんと！ 本当にはからすが毎日欠かさず朝と夕方と、エリヤのところにパンと肉を運んできたのです。すごいですよね！

しばらくして川の水も枯れました。すると主は「ザレパテに住みなさい。そのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」とエリヤに語られたのです。そして、その町の貧しいやもめのために、「かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない」とエリヤに約束なさいました。不思議なことに、どんなに使つても、そのやもめのかめの粉も油もなくならないではありませんか！ さすが、生きておられる神様！ そうして、彼女を通してエリヤを養つてくださったのです。同じように主なる神様は、信じる私たちの心も身体もたましいも、ちゃんと養つていてくださるのです。嬉しいですね！

結び

命のない偽の神ではなく、生きて働かれる主を信じるつて、すごいことですね。主なる神様は私たちの祈りに必ず答えてくださいます！ だつて、生きて働いておられるんですよ！ エリヤがこのお方にお仕えしたように、私たちもお仕えしましょう。主を信じてまっすぐに従いましょう。主が願つていて下さる道を歩みましょう！

♪まことの神様♪

(イン・教会学校さんびか3)

聖書 列王上18・20〜40 テーマ 神のための戦い

序論

(高橋頼男)

エリヤは偶像礼拝に落ちたイスラエルを目覚めさせ、彼らを偶像崇拜から救い出してイスラエルの神、主に立ち返らせるために一人立ち上がりました。そして、アハブにカルメル山に全イスラエルとバアルの預言者450人、アシラの預言者400人、すなわちイゼベルの下で食事をする者たちを集めるよう言いました。そこに祭壇を築いていけにえをささげ、主が神かバアルが神か、火をもつて答える神とするという戦いをしかけたのです。その結果、エリヤの祈りに答えて天からの火が降りました。目の当たりにそれを見た民はひれ伏し「主が神である。主が神である」と言つてバアルを捨て主に立ち帰りました。エリヤは、バアルの預言者を捕え、キシヨン川に連れ下つて殺しました。刑罰の厳しさは罪の深刻さでした。

一、よめく民の前に一人で立つ(21)

エリヤは民の前に立ち、「あなたがたは、いつまでどつちつかずによろめいているのか。もし主が神であれば、それに従い、

もし、バアルが神であれば、それに従え(新改訳)と言いました。エリヤの戦いと挑戦はアハブやイゼベル、バアルの預言者たちに対してだけでなく、よめく民に対してなされています。民はバアル礼拝を行いながら、自分たちの神、主を捨てたという意識がありません。主に対してだけでなくバアルにもいけにえをささげていただけ? のことでした。しかし、主とバアルの両方に仕え、バアル礼拝に抵抗せず、それを排除しないことは主に仕えていないことです(マタイ6・24、ヤコブ4・8、Iヨハネ2・15)。

今日も、同じ戦いが迫っています。私たちにとつて最も深刻な問題は異教や異端との戦いではなく、私たちのキリスト信仰や教会の中にいつの間にか「混淆主義」が入り込んでいることです。クリスチャンとクリスチャンでない人との生活や行動に何の違いもなければどうでしょうか。この世の性の混乱が教会に入ってきています。権力に迎合し、世の成功に感嘆し、大量消費に呑みこまれ、「貪欲」というバアル礼拝がクリスチャンや教会の中まで入り込んでいることです。いつの間にか当たり前になってしまった(クリスチャンとして本来ありえない)習慣や判断が教会の中で見うけられないでしょうか。私たちは、私たちを取り巻く文化の流れにいつの間にか取り込まれてしまっ

ているのです（ヘブル2・1）。

エリヤは、「主もバアルも……」ではなく、「主が神か、バアルが神か」、それを迷っている神の民にはつきり突きつけて戦いました。迷いよるめいているすべてのイスラエルの前に戦いを挑むエリヤは、自分で行っていることが主のみことばと確かな臨在の中でなされていること、神の干渉と見守りの中におかれていることを完全に信じ、確信して立っていました。何と驚くべき信仰でしょう。この時代の中で、神のみことばに固く立ち、生活と行動においてぶれない信仰が教会に必要とされているのではないのでしょうか。

二、壊れている祭壇を繕う（30）

エリヤがこの戦いにおいてまずなしたことは、壊れている祭壇を繕い築き直すことでした。「壊れている祭壇」とは、主の民が主への礼拝をもちや失っている姿、崩れていた神礼拝の姿です。形式信仰や形式礼拝のみが残り、全てに命が失われている。生きた神礼拝の回復こそ最優先されるべきことです。私たちは自分の信仰を主の御前に吟味し、デボーションや礼拝生活が祝福され本当に命あるものとなっているか主の前に吟味し問いましょう。私の壊れている祈りの祭壇を築き直すことから始まらなくてはなりません。

エリヤは、一二の石で主の名によつて祭壇を築きました。そして主の民が神の選びと契約による存在であることを改めて確認しました。教会がみことばによつて整えられることです。

祭壇の上に雄牛が備えられ、その上には大量の水が注がれました。自然的、人為的なあらゆる可能性を防ぎ、ただ神のみわざが現れるために備えがなされました。

三、天からの火を求める（36～37）

エリヤは民を自分のそばに近寄せ、神の前に進み出て（「主よ、わたしに答えてください」と訴えました。この戦いはエリヤの野心や自己中心の思いではなく、迷っている民に主が神であり、エリヤが神の僕であつてすべてが神の言葉に従つてなされたことが明らかになるためでした。祭壇の上に天からの火が下つたことを目の当たりに見た民はひれ伏し（主が神である。主が神である）と言いました。神が信仰の祈りに答えられる生ける神であり、また、イスラエルが本来この神の所有の民であることが明らかになったのです。

結論

神のためみ言葉に堅く立ちましよう。主は、主と教会のため立ち上がる人を求めておられます。

研究資料

(小平徳行)

「数年雨も露もない」とエリヤによってアハブ王に宣告された神は、それから三年目になる時に、雨を地に降らせることをエリヤに予告された。そのためにアハブに会うように命じられる。それは再び雨が降るようになるためには民の悔い改めが必要であったからである。そこで主こそ真の神であることを示すための対決をすることになった。

テキスト

20 カルメル山 現在のハイファ南方で、エスドラエロンの谷から地中海の端まで南東から北西方向に伸びる約32kmの長さの峰。標高約600m。

21 あなたがたはいつまで二つのものに迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい イスラエルの民は主を捨てたというつもりはないがバアルにもいけにえをささげていた。つまり主とバアルの両方のために場所を作ろうとしていたのである。しかし「ふたりの主人に兼ね仕えることはできない」(マタイ6・24)。それゆえエリヤは何に従うべきかを考え、そして決断するよ

うに挑戦したのである。これは妥協を許さない提案であった。

22 わたしはただひとり残った主の預言者です。しかしバアルの預言者は四百五十人あります この時のエリヤはひとりであることを全く恐れていなかった。彼は真の神に仕えているのであり、その神が用いられるならば敵が何人いても問題ではない。

24 そして火をもって答える神を神としましょう 神はこれまでも火を下してこられた(レビ9・24、士師6・21、歴代上21・26、歴代下7・1)。神は焼き尽くす火である(ヘブル12・29)。エリヤは、神は昔も今も変わらないうことを信じて大胆な態度をとって神を証しようとした。それがよかろう バアルは太陽神であり、熱はその要素であるから、この提案はバアルを拜む者にとって受け入れずにおれないものであった。

26 28 バアルの預言者は激しく叫び、身を傷つけることまでした。彼らの頼みは、自分たちの熱心さであった。

29 顧みる者もなかった 何の兆候もない事を意味する。

30 こわれている主の祭壇を繕った ここに主を礼拝し

なくなっている民の姿が反映されている。かつては北イスラエルの中で神に忠実な人々が、この祭壇で礼拝をささげていたが、アハブとイゼベルの支配の下で自分たちの礼拝をささげることが許されなかったのかもしれない。祭壇を繕うこと、つまり礼拝の回復が、神のみわざのためにまず必要なことであった。

31 十二の石 現在の分裂状態を悲しみ、部族の一致を願われる神の願いを象徴する。

32 種二セヤをいれるほどの大きさ 一セヤは約7.3リットル。おそらく祭壇の周りの溝の幅を意味しており、90cmそこそこのことであろう。

33 34 四つのかめに水を満たし、それを燔祭とたきぎの上に注げ 神のみわざ以外による自然発火、または何らかの人為的なわざによる発火のあらゆる可能性を徹底して防ごうとした。またこれは主の御力に対するエリヤの確信を示すものでもあった。

36 39 夕の供え物をささげる時になって エリヤは普段の礼拝の方法に準じて行った。わたしがあなたのしもべであって、あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを今日知らせてください ここまでの一連の

出来事は、すべてエリヤではなく神が計画されたことであつた。そしてエリヤは自分がしもべであつて、主人の意思に従い、主人の手の中の道具にすぎない者であることを表明している。彼は主にすべて明け渡し、ゆだねていたのである。主よ、この民にあなたが神であること……を知らせてください エリヤは単に主が神であることを

奇跡によつて実証することを祈り求めただけでなく、イスラエルの回心を求めた。主が神である この民の承認の言葉自体がエリヤの祈りの答えであつた。

40 バアルの預言者たちを殺したのは気まぐれになされた残酷な行為ではなく、偽預言者に対して律法で命じられていたことに従つてなされた必要な懲罰であつた(申命記13・5、13 18)。この罪がいかに深刻であるかを示している。

参考図書 久利英二「列王記」『実用聖書註解』、舟喜信『新聖書講解・列王記』、ドナルド・J・ワイズマン『テンプル聖書注解・列王記』(以上ののちのことは社)、ハーヴェー・E・フィンレー「列王記第一、第二」『ウエスレアン聖書注解・旧約篇2』(イムマヌエル綜合伝道団)、他

聖書 列王上18・20～40

タイトル 信じて、祈って、いざ、勝利！

暗唱聖句 火をもって答える神を神としましょう。

列王上18・24

目標 神のために信仰をもって戦う者となる。

導入

(和田 治)

「教会学校に来ている時には神様にお祈りをして、御言葉を信じているけれど、普段の生活は、神様を信じていない人たちとなくんにも変わらない」。皆さんの中にそんな人はいますか？ せっかく神様がいつも一緒に居てくださいるのに、それじゃあ残念ですよ。勇気をもって神様のために戦ったエリヤに、今日も注目しましょう！

カルメル山に全員集合！

「アハブ王よ！ イスラエルの全国民と、バアルの預言者四百五十人、それにアシラの預言者四百人を、カルメル山に集めなさい！」エリヤの言葉に王はカンカンです！「おのれ、生意気なやつめ！ 今度こそエリヤを倒してやるうー！」カルメル山の頂は大騒ぎ！ イスラエルの民やバアルの預言者たちでこった返しています…。エリヤは語りかけました。

「イスラエルのみんな！ いつまで、迷っているのだ？ 私たちの主がほんとうの神様なら、このお方にこそ従うべきではないか！」

火をもって答える神こそ…

バアルか、主なる神様か… いったいどちらが本物なのか、エリヤははっきりと示そうとしています。その方法はこうでした。一頭の牛を切り裂いて、たきぎの上に載せます。もちろん誰も火をつけません。「あなたがたはあなたがたの神の名を呼びなさい。わたしは主の名を呼びましょう。そして火をもって答える神を神としましょう！」。

さあ大変です！ なんてったって、バアルの預言者は450人もいるのです。でも、イスラエルの神を信じる預言者は、エリヤたった一人だけ…。数で考えれば、エリヤに勝ち目はなさそうです…。大丈夫なんでしょうか？

「バアルよ、おおお、バアルよ！ どうかお答えください！」朝から昼まで叫び続け、踊り続けたバアルの預言者に、誰からも、何の答えもありません。「おやおや、あなたがたの神は考えごとでもしているのかな？ 旅にでもお出かけかい？ ひよっとしてお昼寝中じゃないのか？」エリヤの言葉にますますむきになって、彼らは刀とやりで自分たちのか

聖書 列王下5・1～14 テーマ 大勇士の癒し

序論

(高橋頼男)

スリヤのナアマンは、大勇士で王にも絶大な信頼を置かれる偉大な将軍でした。しかし、彼には隠れたところに大きな悩みがありました。それは、重い皮膚病にかかっていたのです。これまで、さんざん治療のために手を尽くしましたが、一向によくありません。ナアマンの家には奴隷となっていた一人のイスラエル人の娘がいました。彼女はナアマンの悩みを気の毒に思い、イスラエルには重い皮膚病をいやすことができる神の預言者がいることを語りました。そのことを伝える聞いたナアマンは、さつそくスリヤ王に許しを願い出しました。そして、イスラエルの預言者に会うために王の親書と多くの贈り物を携えてイスラエルの国にやってきました。

一、ナアマンの悩み(1)

〈彼は大勇士であったが、重い皮膚病をわずらっていた〉のです。ナアマンは、表向きは立派な鎧よろいを身に纏まとう大勇士でしたが、その中身、身体は重い皮膚病をわずらっていて、肉はた

だれ、腐っていたのです。その病は彼がどんな医者にかかり、どんな薬を用いて治療を試みても治らない業病のように厄介な病気でした。だれでも、隠れた内面の悩みというものがありません。自分で隠しているけど、表に、人前にはとても出せないお見せできないものです。しばしば自分自身を打ちのめし、痛めつけ、苦しめ貫く問題です。私たちも、そのような内面の悩みを抱えていることがないでしょうか。私たちの罪(肉)の問題はまさしくそれです。ナアマンが抱えていた内なる悩みは、私たちが抱えている罪の問題、醜い肉の姿ではないでしょうか。罪は自分では解決できません。何度も試みて失敗してしまいます。肉の問題は、自分の内にさらに深くしみ込み食い込む内面の問題です。

「わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ7・24)と、私たちもパウロと共に呻き叫んだことはないでしょうか。しかも、この罪は伝染し、私たちを破壊し、やがて死に追いやる業病です。死をもたらせ、滅びに追いやるのです。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6・23)。この問題の解決はどこにあるのでしょうか。

二、イスラエルには神の預言者がいる(3)

「ああ、御主人がサマリアにいる預言者と共におられたらよかったですように。彼はその重い皮膚病をいやしたことでしょう」。ナアマンの妻に仕えるイスラエルから捕えられていた一少女のことは、病に苦しめぬくナアマンにとって暗闇に差し込む光、「福音」そのものでした。なんとしても、どんなことをしても、その神の預言者のところに行つて、親しく出会ひ、患部に手をおいてお祈りしてもらつて癒していただきたいと切に願ひ、決心してイスラエルにやつてきたのです。

「イスラエルには、病を癒す神の預言者がいる…」との一人の小さな者の証しが、大きな働きをなしました。

三、行つて七たび身を洗いなさい(10、14)

神の預言者をようやく探し当てたナアマンは、家の門口に立つて、はるばる訪ねてやつてきた目的を告げます。しかし、取り次ぎのしもべが顔を出すのみで、神の預言者(エリシヤ)は会つてくれません。ヨルダンに身を浸し、七度そうしなさいと伝えるのみでした。ナアマンは、怒り心頭です。スリヤの偉大な大勇士である自分がわざわざ王の親書と贈り物を携えてイスラエルにまで来ているのに…。怒つて去ろうとするナアマンにしもべたちが言いました。「預言者があなたに、何

か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかつたでしょうか。まして彼はあなたに『身を洗つて清くなれ』と言うだけではありませんか。〈そこでナアマンは下つて行つて、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとかえつて幼な子の肉のようになり、清くなつた〉のです。謙遜と謙りをもつてみ言葉に従ひ、水の中を下つていき、その病によつてただれた身を水に浸すのです。自分が、癒し難い罪をその身に負うものであることを認め、キリストの死と葬りのバプテスマにあずかり、共に死に、共に生きるという恵みに思い切つて浸されましょう。キリストの血しよのきよめに与りましょう。

「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(1ヨハネ1:7)。

「心はずすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもつて信仰の確信に満たされつつ、みまゑに近づこうではないか」(ヘブル10:22)。

結論

隠れた内面的な悩みがあるなら、今こそ謙つて、神のきよめと癒しを求め、神の解決をいただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

ここはナアマンの重い皮膚病の癒し(きよめ)の記事であるが、ただ癒しだけにとどまらず回心にまで至った(15)。当時は多くのユダヤ人が預言者の訓告を気にも留めない時代であり、多くの重い皮膚病患者がいたが、誰もきよめられることはなかったのである。その中で異邦人であるナアマンだけが、預言者による神の言葉に従い、きよめられたのである。イエスはこの事をご自身の郷里の人々の不信仰を指摘する時に語っている(ルカ4:27)。

テキスト

1 ナアマン スリヤでは一般的な名前で「慈悲深い」を意味する。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利を得させられた。これは列王上22章のアハブ、ヨシヤパテ連合軍とスリヤとの戦いのことかもしれない。異邦人も主に用いられる器である(イザヤ10:5、44:28)。重い皮膚病(ツァーラアト)は旧約聖書においては種々の病気や皮膚病に用いられている。様々の腫れ、かさぶた、白斑、明るいあるいは暗い斑点、かさかさの皮膚などの特徴を伴う。またそれは羊毛、麻、革製品のかびや、壁

の真菌類の特徴も表す。

2 3 ひとりの少女 この少女はナアマンの癒しと回心において重要な役割を果たした。彼女はスリヤの略奪隊に捕えられて連れて行かれたが、主に遣わされたといえる。名も無き捕われ人であったが大胆に証しをした。いかなる境遇においても福音の前進の機会となり得る(ピリピ1:12)。いやしたことでしょう この章ではこの病について「いやす」と「きよめる」の二つの言葉が使われている。「いやす」という言葉には「動かす、取り除く」という意味がある。つまり病から人を動かす、自由にする、または症状を取り除くということである。重い皮膚病はイスラエルでは宗教的な意味合いで扱われ、「きよさ、汚れ」の問題とされている(レビ13章)が、異邦人にとってはいやされるべき病気として扱われている。

5 6 わたしはイスラエルの王に手紙を書きましょう スリヤの王がイスラエルの王に手紙を書いたのは、預言者も王の支配下にあり、王からの指示で事が進むと思っていたからであろう。銀十タラントと、金八千シケルと、晴れ着十着 診断を求めるときに贈り物をするのは慣例であったが、これは例外的な豊富さであった。

7 イスラエルの王は：衣を裂いて言った 重い皮膚病の癒しは人間的には不可能なものであったゆえに、これを無茶な要求と感じ、戦争の挑発と受け取ったのであろう。ナアマンは膨大な贈り物を携えて行ったが、それでもイスラエルの王の恐れを和らげることはできなかった。

8 どうしてあなたは衣を裂いたのですか エリシヤはイスラエルの王の不信仰を指摘している。イスラエルに預言者のあることを知るようになる これはエリシヤというよりも彼を通して働いておられる神の存在が知られるようになることを意味している。そして同時に、他の神々が無力であることを示す機会にもなるのである。

11-12 ナアマンは怒って去り ナアマンは自分なりに、どのような方法で癒しがなされるのかを思い描いていた。しかしエリシヤの要求はナアマンにとって予期せぬ要求であり、彼が自分の前に姿さえ現さなかったことを無礼に感じたのである。ダマスコの川：はイスラエルのすべての川水にまさるではないか ナアマンが怒ったのは、ダマスコの川がヨルダン川と比較して立派な川であるという理由もあるかもしれないが、真の理由は、自

分をへりくだらせて神の方法に従うことに気が進まなかったことであつた。ヨルダン川が用いられたのは、癒しは川の水ではなく主がなさるものであることを示している。エリシヤの命令はナアマンに謙遜と信仰を教えるためであつた。

13 わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかつたでしょうがしもべたちの訴えは理にかなつていた。ナアマンは自分の病気が重いため、簡単な方法でよいはずがないと思つたのかもしれない。しかしこの病の癒しは困難であり、神の力でなければ不可能であるので、ナアマンが考えるどのような困難な事をしてもし決して癒すことはできなかったであろう。だからこそ神の恵み以外の方法に期待はできないのである。ナアマンの発想は自分の苦行にたよるもので福音とは異質であつた。

14 神の人の言葉のように 癒しは神に従うところからくる。七たび 七は完全数。同じことを繰り返すのは信仰が試されることでもあつた。

参考図書 7月28日分と同じ。

聖書

列王下5・1〜14

タイトル

どうしてですか？ 隠れた悩みを：

暗唱聖句

身を洗って清くなれ。 列王下5・13

目標

隠れた内面的な悩みのために神の解決を頂く。

導入

(和田 治)

「こんなこと、誰にも言えないよな…。」しょっちゅう「きみはほんとに良い子だね〜」って言われてきた6年生の勝(まさる)君。でも、実は、むしゃくしゃした時、大人の見えないところで小さい弟や妹につい、あたっちゃんです。「だめだ、もうやめなくちゃ!」と思いつつも、どうしても止められません。皆さんは、誰にも言えない悩みってありますか？ 今日、隠れた悩みを解決していただいた人のお話です。聴きた〜い!

大勇士ナアマンの悩み

「ぐぐぐぐう〜…く、苦しい〜…」今日もスリヤの国の將軍がうめき声を上げています。彼の名はナアマン。主なる神様の力によって母国に勝利をもたらした大勇士です! でも、見るからに強そうな外側の姿からは想像もできない弱点

が、隠れたところにあつたのです。実は、身体中の皮膚がただれて痛くてものすごく苦しい、重い皮膚病で、ナアマンは悩み続けていました。その皮膚病は、どんな医者にも治せない重い病で、肉も腐っていくのです。「こんな痛さなんてへっちゃらだ! 負けるものか!」と何度言い聞かせたことでしょう。でも、我慢できないほど苦しくて、もう、どうしようありません…。

ほとんどの人はナアマンがそんな隠れた悩みを持っていることを知りませんでした。でも、彼の妻に仕えているユダヤ人の少女にはわかっていました。彼の病気の重さも、そして、それを誰が癒せるのかも! 「ご主人様は、サマリヤにいる預言者のところへ行かれたらよろしいのに。きっと、その方が思い皮膚病を治してくださいませわ。」

預言者エリシャのことばの通りに!

少女の一言がきっかけで、間もなく、イスラエルの預言者エリシャのことを知ったナアマン。たくさんの贈り物をもって、王様にお手紙も書いていただいて、ついにエリシャのお家の前までたどり着きました。ところが、お家から出てきたのはエリシャではなく、その使いでした。「ヨルダン川へ行つて七回身体を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだはも

どのように治って清くなるでしょう。「な、な、なんだとおく!? 預言者がじきじきに出て来てあいさつし、手をあて、彼の神の名を呼んで、治してくれると思っていたのに! 川で洗えだど? それなら、国に流れておる川のほうが、よっぽどきれいなじゃないか。ばかばかしい!」

かんかんに怒ったナアマンは、来た道を引き返すではありませんか。と、その時、ナアマンのしもべたちが追い付いてこう言いました。「ご主人様、あの預言者に、何か難しいことをせよと言われても、そうなさったのでしょう。それなら、『身を洗って、きよくなれ』と言われてただけのことですから、そのとおりになさったらいかがですか?」

「むむ、それもそうだな。よし!」気を取り直したナアマンは、ヨルダン川へ下って行き、言われたとおり、七回、水につかりました。すると、どうでしょう。皮膚は幼子のようにつやつやし、すっかり治ったではありませんか! 「すごい! まことの神様が癒してくださったのだ!」

隠れた悩み

大勇士ナアマンでさえ、隠れた悩みがありました。でも、エリシャを通して神様が癒してくださいましたね。同じように、隠れた悩みがあっても、でもどうか安心してください!

神様はあなたの悩みを良く知っていて下さって、解決してあげたいって願ってくださっています。「実は学校でいじめられていてとっても辛い!」とか、「自分でもいやな癖があつて、でも、どうしても止めれない!」とか。ひとりで悩んでいるで神様にお祈りしてみよう! 神様が届いてくださいますよ!

結び

そして、どうか忘れないでください。隠れた「罪」も、絶対にそのまましておいてはだめだつてこと! もし、「お祈りなんてしたくないよ。イエス様を信じるだけで清くされるなんてばかばかしい」なんて言ったら、赦ゆるされませんよね。でも、ナアマンが言われた通りにしたように、神様が定めてくださった方法の通りすれば良いのです。「イエス様の十字架は僕の、私のためでした。イエス様、〇〇の罪を、ごめんなさい、お赦しください。清くしてくださいと信じます!」って素直にお祈りすれば、必ず赦され、清くされるのです! 今日、ぜひそのようにお祈りしよう! あの勝君も、神様にお祈りして、罪赦され、もう二度といじわるしないやさしいお兄ちゃんに変えられましたよ! ハレルヤ!

♪フリー♪

(イン・教会学校さんびか40)

聖書 ヨナ1・1～17 テーマ 神の前を離れて

序論

(石田高保)

ヨナの預言者としての行動には不従順があり、筋が通っていたとはお世辞にも言えません。しかしそれでも神はあきらめずに彼を用いなさいました。そのように私たちにもかかわっておられると見ることができます。

一、神から離れようとする人

〈立つて、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ〉、つまり悔い改めを宣べ伝えよと主からお声がかかった時、ヨナはどうして受け入れることができませんでした。というのもヨナの祖国イスラエルは、その北方に位置するアッサリアに圧迫されており、ニネベはその首都だったからです。ヨナがその町に神の言葉を伝えて人々が悔い改めでもしたら、敵を救うことになってしまうと恐れたので、正反対のタルシシへ船で渡ってしまおう、そうすればこの望ましくない使命から逃れられると考えたわけです。

渡りに舟とばかりに、〈ちよほど、タルシシへ行く船があったので…乗った〉。自分の願ったように事の運ぶことが、必ずしも主のみどころとは限らないことがあります。むしろその反対を行く誘惑であるかもしれませぬ。ヨナの場合は三度も〈主の前を離れて〉と書かれてしますから、それがはっきりしています(3、10)。しかし主は私たちが大きな過ちをしないように、み言葉や助言者を備えておられます。

人間は神に与えられた自由意志によって、神の言葉に従うことも、従わないこともできます。神は人間を強引に従わせることはなさいませぬ。しかし神は摂理の中でみ言葉に従い、祝福にあずかるようにと道備えをなされます。〈主は大風を海の上に起された〉のもその一つの現れです。

二、追い求める神

〈わたしは海と陸とをお造りになった天の神、主を恐れる者です〉という告白に船乗りたちが震え上がったのは、ヨナが海を支配する神にそむいたことを知ったからです。そして〈あなたはなんたる事をしてくれたのか〉と、異邦人たちから過ちを責め立てられては、ヨナも恥じ入り、ついに本当のことを言いました。〈この激しい暴風があなたがたに臨んだのは、わたしのせいです〉。ヨナは、この絶体絶命の状況を招いたのは、自分が主の命令にそむいて逃げたせいであることを自覚しています。当時の船乗りたちは、人を海に投げ入れて

神々への犠牲とすれば、その怒りがなだめられて暴風が収まると信じていました。それを知っていたヨナは自分を犠牲にしてくれと申し出るので、船乗りたちはできるだけその手は使いたくなかったため、船をこいで陸に戻ろうともがきましました。しかし万策尽きたとき彼らはやむを得ずヨナを海に投げ入れました。するとたちまち大嵐が嘘のように静まりました。これには船乗りたちも恐れおののき、ヨナの神がまことに天地を造られた神だと認めざるを得ませんでした。皮肉にもヨナの不従順な行動を逆手にとって神が栄光を表されることとなりました。

いっぽう海に投げ込まれたヨナと云えば、思いがけない方法で命拾います。(主は大いなる魚を備えて、ヨナをのませられ)ました。しかも三日三夜その魚の腹の中で生かされ、おそらく元の海岸まで運ばれて生還します。神は大嵐を起こしてヨナを危険にさらすだけではなく、大いなる魚を用意して彼の命を救われました。一見ありえないことのようにですが、イエス様はご自分が死人の中から三日目によみがえると預言するにあたって、ヨナの出来事を引き合いに出しておられることから、まぎれもなく神の奇跡であることがわかります(マタイ12・40)。ここにはどんな方法を使ってもヨナを

預言者として用いようと、それによって二ネベの人々を救おうとする神の熱心が表れています。同じように自分を愛するようにならぬ人を愛し、福音を伝えるという使命のために用いられない人はいません。神は私たちを何度でも用いて下さるのです。

結論

神の前を離れる、それはあつさり、あるいはぎりぎりのところで神の言葉よりも自分の思いを選び取ってしまう傾向と言えるでしょう。また神の使命に従いきれない心の状態を指しているのかもしれませんが。私たちは聞く耳を持ちさえすれば神の声を聞くことができます。聖書を読んでいる人、メッセージを聞いている人は、すでに神の声を聞いていると言えましょう。心にみ言葉が浮んだら、あとは従う仕事だけが残っています。それは誰も代わることができません。しかし神の声を聞いて従うという営みには、必ず祝福があります。その人はいつも喜んでいられるだけでなく、身近な人に良い影響を与えるようになります。もし神の前を離れようとしている人がいたら、自分のためと思つて関わってみてはどうでしょうか。

研究資料

(小平徳行)

本書には異邦の民をあわれむ神の愛と共に、一人の預言者ヨナを忍耐強く取り扱われる神の愛が描かれている。

テキスト

1 アミツタイの子ヨナ ヘブル語で「鳩」という意味。列王下14・25によれば、ヨナはヤラベアム2世の領土拡大について預言した北イスラエルの預言者として登場している。父親の名が同じであることから、本書のヨナと同一人物であると考えられている。

2 ニネベ テイグリス川東岸にニムロデによって築かれ(創世記10・11)メソポタミヤにある最古の町の一つ。アツスリヤ王国の主要都市でセナケリブ王によって首都と定められた。後にメディアヤとバビロン連合軍によって滅ぼされる(BC612年)。向かって(△)アル) この前置詞は何か「逆らって」という意味があり、異教の地ニネベに対する宣教の厳しさが表されている。預言者ヨナの使命は異教の民ニネベの罪に対して立ち向かい、彼らに罪の悔い改めを訴えることであつた。

3 ヨナが使命を放棄した動機はニネベの宣教が困難で

あつたというよりは、4・2のヨナの告白から分かるように、彼の宣教によつてニネベが悔い改め、神が災いを思ひかえされるのではないかと恐れからであつた。ヨナとしてはニネベはイスラエルにとって脅威となるため、滅びることが望ましかつたのである。彼は臆病だつたのではなく、偏狭ではあつたが愛国心から神に従わなかつたのである。しかし、理由はどうであれ主の命令に従わなかつたことは良い事ではない。タルシシ どこを指しているのかは諸説あるが、通常は現在のサルジニアか、あるいはスペイン南部のタルテソスと同定される。ここはヨナの時代のヘブル人たちに知られていた最も遠く離れた貿易相手であつた。いずれにせよタルシシは海を隔てた遠隔地であり、「世界の西の果て」という響きを持つ表現としても用いられている(詩篇72・10、イザヤ66・19)。ヨナがタルシシ行きの船に乗り込んだのは、神の召命を逃れてできるだけ遠方に行こうとしたためである。ヨツパ(△)ヤツフォ) 地中海沿岸にある港町で、エルサレムの北西56kmにある。現在はテル・アビブと合併。

4~5 神への不服従は当人だけでなく、周囲の人々にも損失をもたらすことがある。めいめい自分の神を呼び求め

水夫の国籍が様々であったのか、またはフェニキヤなどの多神教国の民で、各自の守護神がいたのかもしれない。積み荷（ヘケーリーム）ただの荷物だけでなく、船具をも指す。事態がいかに切迫していたかを思わせる。船の奥に下り 現実から少しでも遠くへ逃れようとする試みであり、神からの逃避であった。ヨナは嵐の原因が自分にあることを知っていながら、あくまでも神から離れようとする愚かな試みであった。

7 くじを引いて 直訳は「くじを落とす」。くじ（ヘゴールール）はアラビヤ語の石と関連のある語であることから、いくつかの小石が用いられて、ある特定の一つが落ちることによって決められたのであろう。くじで神のみこころを知ろうとするのはユダヤ人を含め広く古代の人々の間で用いられていた。旧約聖書でも多くの例があり、正当な方法とされていたことが分かる。

9 ヘブルびと イスラエルの民が他の異教の民との区別を意識した呼称。海と陸とをお造りになった天の神 今、海が荒れているのは、この神の怒りのゆえであることにヨナは気づいていた。

10 はなはだしく恐れて 水夫たちがひどく恐れたのは、

イスラエルの神が自分たちの神々とは比較にならないほど恐ろしい神であるという認識によるものであった。

12 わたしを取って海に投げ入れなさい ヨナには荒天の原因になっている自分がこの船にいれば船は助かるに違いないという確信があった。

13 ヨナに同情した船員は何とか彼が犠牲になることを避けようとして船を陸に戻そうとしたが不可能であった。罪の救しは犠牲なしにはあり得ない。

16 この異教の民の反応は彼らのうちにイスラエルの神に対する畏敬の念が起こされたことを示している。

17 歴史的事実でないとする解釈や、類似の事件が実際に起こったことを指摘して、信ぴょう性を裏付けようとする論議も展開されてきたが、類例が見いだされなくても、全能の主がなされた超自然的御業と考えるべきであらう。

参考図書 鈴木昌「ヨナ書」『新聖書注解・旧約4』（いのちのことば社）、勝原忠明「ヨナ書」『実用聖書注解』（いのちのことば社）、W・R・トンプソン「ヨナ書」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇4』（イムマヌエル綜合伝道団）他

聖書

ヨナ1:1~17

タイトル
暗唱聖句神さまから逃げるヨナ
わたしは海と陸とお造りになった天の
神、主を恐れる者です。ヨナ1:9

目 標

神に背いて歩むことの災いを覚え、神に
従う者となる。

導入

(松浦みち子)

なぜなのでしょう。神様は私たち人間に対し何を望んでおられるでしょう。(自由に答えさせる)。ズバリ、答えましょう！「すべての人が救われることです。その中には、人を殺した死刑囚も含まれるのですよ」「えっ」。驚かないでください。イエス様は、そのために十字架にかかり、すべての人のために救いの道を開いてくださったのです。

でも、私たちの心には、そのような広くて深い愛がないことに気づかされますね。ちょっと胸に手を当てて考えましょう。あなたの心に、あのいやだな、嫌いだなと思う人が浮かんできませんか？ まして、自分をいじめたり、乱暴する子など好きになれませんね。むしろ、あんなやっぴなければよいのにとと思うこともあるでしょう。今日は、そんな心を

もった人のお話です。

神様の命令を拒むヨナ

その人の名はヨナと言います。「鳩」という意味のある名前ですが、全然鳩のように素直ではありません。頑固なイスラエルの預言者でした。ある日、神様はヨナに「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしのことを伝えなさい。あの町の人々は悪いことばかりしている。このままでは滅びてしまう。神様を信じ、悪い事をやめるように伝えなさい」と、言われました。「えっ、ニネベなんてとんでもない！」ヨナは神様の命令を拒みました。さて、ニネベの町というのは、アッスリヤの首都でも大きな町でした。当時のアッスリヤの国は強固で乱暴で残忍な国だったので周りの国々から怖がられていました。しかも、やがてイスラエルを滅ぼし、全てのものを持ち去ってしまうと預言されていたのです。ヨナはそんなニネベの町に行きたくありませんでした。「悪い事ばかりするアッスリヤの人々は滅んでしまえばいいんだ」と思っていたのです。そこで、ヨナは神様の命令に従わず逃げようと考えました。ヨッパの港に着くと、そこには丁度タルシシ行きの船がありました。タルシシはニネベとは全く逆方向の港です。「これは、よい具合だ」と、船賃を払い船に乗り込むと、

「あーあ、これでひと安心。疲れたわ」と船底に下りていつて「ぐーぐー」といびきをかいて眠ってしまいました。

思いがけない大あらし

ところが、しばらくすると海に大風が吹いて大荒れになりました。ビュービューと激しい風が吹きつけ、船は木の葉のように揺れ、今にも沈みそうです。ザッブーン、大波が甲板を洗います。「わあー、船があぶないぞー！ このままでは沈んでしまう」。「さあ、ぐずぐずしないで、荷物を捨てろー」みんな真つ青になり大慌てです。人々は口々に、それぞれの神様の名を呼びながら「助けて下さい！」と叫び声をあげています。ところがヨナだけは船底であいも変わらずグーグー眠っているではありませんか。人々は「こんなに海が荒れるのは誰かのせいにはいかない！」「そうだ、くじ引きしてみよう」。全員でくじ引きしました。眠っているヨナのところにもくじが回ってきました。「さあ、起きてください。くじ引きですよ」。「うーん、むにゃむにゃ。どーれ」。「ややや、当たったぞー！ いったいあなたは誰か。何をしたのか」。「ごめんない。わたしはヘブル人です。わたしは海と陸とお造りになった天の神、主を恐れる者です」。ヨナは自分が神様の命令に背いて逃げてきたことを話し、「どうぞ、わたしを海に投げ

込んで下さい。そうすれば風はやみ静かになるでしょう。かわいそうですが、仕方ありません。人々は「それ、1、2の3」。「ブーン。ザッブーン。ブクブクブク。ヨナは見る間に海に沈んでいきました。なんとということでしょう、海はたちまち静かになり、人々は神様の大きな力に驚きました。

神様の備え

さて、ヨナはどうなったのでしょうか。おぼれて死んでしまったのでしょうか。いいえ、神様は大きな魚を海の底に泳いでこさせ、ヨナを飲み込ませたのです。「バクツ」、「あれー、ここはどこだろう。何だかぬるぬるするなあ。これって、わかめ？ あつ、ここは魚の腹の中だ！」ヨナは、「神様、助けてください。ありがとうございます。ご命令に背いてごめんない。これからは、神様のおことば通りにいたします」と心からあやまりました。

神様はなんと憐れみ深いかたでしょう。背いたヨナを見捨てずに魚を備えて助けてくださいました。私たちは、ヨナにならうのでなく、神様を恐れ、すなおに「はいっ」と、従うものになりましょう。

♪ヨナのうた♪

(救いの聖歌36)

聖書 ヨナ3・1～4・11 テーマ 神の憐みによる宣教

序論

(石田高保)

ヨナは神への不従順のため、海に投げ入れられたにもかかわらず、備えられた大魚に助けられ、その腹の中で三日間、悔い改めと再献身の時を持ちました(2章)。そういうヨナに神は再び使命を授けます(3・1、2)。人は何度でもやり直せる、神は何度でもやり直させて下さると励まされます。

一、憐みなしの宣教

〈そこでヨナは主の言葉に従い〉。ずいぶんと遠回りしたものの、ヨナはようやく主に従ってニネベへと向かいます。ニネベは大都会で、歩き回るには三日もかかるほどでしたが、意外なことにさばきの預言を触れ回って一日目で人々が神を信じて悔い改め始めます。それは一般民衆だけでなく、王や大臣という支配者にまで及び、ついに彼らの命令で国中が断食と祈りで罪の悔い改めを表すこととなりました。高慢で暴虐な人々と思われていた彼らが、これほどあっさりと神に立ち返ったことは神の御業であることを、ヨナは認めざるを得なかったでしょう。

神はニネベの悔い改めを見て、すぐに災いを撤回されます(3・10)。こうしてニネベは40日たつても滅びなかったので、人々は胸をなでおろしたに違いありません。

ニネベの人々の悔い改めは、イエス様から高く評価されています。「ニネベの人々が、今の時代の人々と共にさばきの場に立って、彼らを罪に定めるであろう。なぜなら、ニネベの人々はヨナの宣教によって悔い改めたからである」(ルカ11・32)。

ところが喜ぶ者と共に喜ばなかったのはヨナです。〈これを非常に不快として、激しく怒り〉ます。主の言葉を宣べ伝えたら、ニネベは救われることが予想できたから従いたくなかったのです。私が怒っているのはあなたのせいですと言わんばかりです。受け止められない思い、面白くない気持ちと神にぶついています。それに対して神はあなたの怒りは正当ではないとたしなめられました。それほどまでヨナは感情的にも混乱していました。もし憐みなしで、義務感や罪悪感から福音を伝えるとすれば、動機としては健全ではないでしょう。主は「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」と言われます(マタイ9・13)。

二、宣教は憐みの心から

こうなったら自分の願いだおりニネベがさばかれるのを見届

けてやろうと、ヨナは見晴らしの良い所に小屋を作って長期戦の構えを見せます。人々が再び神に背くようになるのを期待したのでしょうか。もしそうなら預言者にあるまじき行動です。信仰者も人間的な願いの支配を許すと、思いもよらない行動に出ることがあります。そういう時こそ信仰の仲間の出番です。慰めたり、いたわったりするばかりではなく、愛をもって注意してあげて下さい。イエス様は言われます。「あなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい。そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい」(ルカ17・3)。それでこそ神の家族ではないでしょうか。

熱さから守るためにせっかく神の備えたとうごまが枯れてしまうと、ヨナは神への怒りを再び燃やします。それをたしなめられると(わたしは怒りのあまり狂い死にそうです)とどこまでも頑張つて怒りが収まりません。神に対して正直であるのは良いことです。神はその気持ちを受け止めつつも、ついにご自分の心の内を明らかにされます。(わたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、…この大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか)。親の心子知らずというのでしょうか、ヨナはここに至つて神の広大無辺な憐みを知ります。彼も自分の独りよがりな正義感を恥じたでしょう。神は自分を偽る善人では

なく、自分に正直な罪人を求めなさいます。

結論

「好きな人を愛するためには、神の恵みは要らない。しかし嫌いな人を愛するためには、神の恵みを必要とする。私たちは敵を愛する程度しか、神を愛していないのである」という言葉があります(フリーツプ・ヤンシー)。ヨナはまさにこのことを試されたわけですし、私たちも同様です。人を愛するとは、愛することを選び取ることであり、愛せるから愛するのではなく、愛せないとするのは実は逃げ口上で、本当は愛さないでいるだけです。ヨナのように愛することから逃走し、愛さないことを選択しているわけです。しかし私たちは神の恵みにより、聖霊によつて愛することを選択することができます。そのときすでに広い意味で福音宣教は始まっていると言えるでしょう。人の話を真剣に受け止め、素直な心で耳を傾けることは、その人を愛する行動です。人との語らいの中で導きがあれば福音を語ることもよいでしょう。しかしそのタイミングには聖霊の知恵が必要です。「黙るに時があり、語るに時があり」(伝道3・7)ですから、主に聴きながら人と語り合い、主の憐みをもつて宣教してゆきましょう。

研究資料

(小平徳行)

神に逆らったヨナは死を覚悟したが、神の備えた大魚によつて助けられた。神に賛美と祈りをささげたヨナは陸地に吐き出され、神は再びヨナに任務を遂行させるために、二ネベに遣わされた。今回は主に従うのだが、彼は更に取り扱われることが必要であった。

テキスト

3・4 ヨナの宣教方法は極めて単純なものであった。何の足掛かりもなく、彼はただ悔い改めのメッセージを一日中歩き回って叫び続けた。**滅びる**(ハーフアク) 転覆させる、激しい破壊をもたらすことを言う。この語はソドムとゴモラの滅亡にも用いられている(創世記19・29)。

5 ニネベの人々の回心は鮮やかなものであった。彼らは断食をし、灰をかぶって荒布をまとい、真摯な態度で罪を悔い改め、神を受け入れたのである。**大きい者から小さい者まで** 年齢、階層、教育などにかかわらず全ての人々を指している。

6 その回心は王室にまで至り、王も一般市民同様に悔い改めた。**朝服を脱ぎ** 王としてではなく、神の前にある一人の

人間として。

7 悔い改めが王室に及んだ結果、悔い改めの布告がなされた。それは人々のみならず、獣や家畜に至るまで悔い改めを命じる徹底ぶりであった。これに対する神のあわれみも家畜にまで及んでいる(4・11)。

8 おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ 悲しみを表す格好をして祈るだけでなく、ひとりひとりが悪しき行いを離れるように命じている。

10 ヨナの宣教には罪の赦し(ゆる)の可能性については語られていなかったが、ニネベの人々の悔い改めの祈りと行為は、神の目にとまり、神の正しい愛の性質に基づいたあわれみを引き出した。

4・1 ヨナはこれを非常に不快として ヨナはその不機嫌、不快を隠そうともせずに、神に対して怒った。それは彼が偏狭な愛国心をもっており、神が選民であるユダヤ人以外の民をあわれんだことに対して怒ったと考えられる。ヨナは神の命令には従ったが、神のあわれみの心をもって宣教したのではなかった。

2 なぜなら、わたしは…知っていたからです ヨナは神のあわれみ深さを、父祖たちの教えや、律法などによってよく

知っており（出エジプト34・6、7）、それは選民のユダヤ人に限られない普遍的なものであることを最初から十分認識していた。

3 生きるよりも死ぬ方がまだからです ヨナの悔しさがいかに激しいものであったかを示している。だからこそ、最初にニネベ宣教を命じられた時も、神のさばきを覚悟で背いたのであろう。

4 あなたの怒るのは、よいことであろうか ここから神はヨナにご自身の心を教えるために、彼を取り扱われる。よいこと（ヘヤータブ）は「よく行う、十分に行う、正当なことをする」という意味がある。神はヨナが怒るのは正当なことであるのかを問うている。

5 町のなりゆきを見きわめようと ヨナは神が彼の訴えに答えて、ニネベに何事かをなしてくださるのではと考えたか、あるいはニネベの人々の悔い改めの純粹性を疑っていたのかもれない。

6 とうごま パレスチナ地方ではごくありふれた植物で、やわらかいつる状の茎とぶどうの葉のような大きな葉を有し、2〜3日の短期間のうちに大きく成長して十分な日陰を作ることができる。しかし茎が少し損傷しただけで枯れてし

まうひ弱な性質を持っている。備える（ヘマーナー）「任命する、定める」の意。1・17と本章とで4回使われている。神は様々なものを備えてヨナを取り扱われた。

10〜11 惜しんでいる（ヘフース） 「あわれみをもって見る」の意。神はヨナがとうごまを惜しむことを責めてはおらず、その思いを草木より尊い人間に向けるべきことを教えている。神はニネベの住民を惜しむがゆえに、悔い改めた民を赦されたのである。ヨナは主の心が分かっていなかった。しかし主はそれを承知の上で、ヨナに再びチャンスを与えたのである。それはヨナに主の心を教えるためであった。左右をわきまえない人々 神の律法を知らず、善悪の判断のつかない人々、霊的な真理を理解していない人々のこと。

神はたとえ異邦の民であっても選民と同じように、分け隔てなく救いを与え、育み、変わらぬ愛と恵みを注いでくださる。すべての人間の創造主である神は私たち一人一人に関心を持ち、私たちを罪から解放し、真の祝福の道へと導いてくださる。しかしニネベは、いつしかこの神から離れ去り、ついに滅亡を味わわなければならなかった。

参考図書

8月11日分と同じ。

聖書

ヨナ3・1〜4・11

タイトル

神のことばを伝えたヨナ

暗唱聖句

ましてわたしは十二万あまりの、右左を

わきまえない人々（中略）を、惜しまな

いでいられようか。

ヨナ4・11

目標

神の憐れみを覚え、福音を伝える者となる。

導入

（松浦みち子）

先週は神様の命令に背いて、神様から逃げたヨナのお話しを聞きました。ヨナは海に投げ込まれましたよね。ところが神様は憐れみ深い方ですから、大きな魚を備えてヨナを助けて下さいました。魚に飲み込まれたヨナは、いったいどうなったのでしょうか。

二度目のチャンス

大きな魚のお腹の中で、三日三夜、ヨナは祈って過ごしました。「神様、ごめんなさい」と心からあやまるヨナを、神様は、憐れんで魚に命じて陸地に吐き出させました。ピュー、ドシーン。「神様さま、ありがとうございます」。ヨナはどんなに嬉しかったことでしょう。

そんなヨナに再び神様はお命じになりました。「立って、

あの大きな町ニネベに行って、わたしのことばを伝えなさい」と。神様は、一度の失敗で、もうだめだとおっしゃる方ではありません。「もう一度やつてごらん」と二度目のチャンスを与えて下さる優しいお方です。ヨナは、再び声を聞いたとき、「はいっ、行きます」と、おことば通り出かけました。ニネベの町はひと回りするのに、三日もかかる大きな町です。ヨナはニネベの町を一日中歩き回って神様のことばを伝えました。「みなさん、40日すると、この町は神様に滅ぼされますよ」。それを聞いたニネベの人々は、びっくりして大人も子どもも、みんな神様のことばを信じました。そのことが王様の耳にも入り、さつそく王様は町中におふれを出しました。「悪いことをやめて、神様にお祈りしなさい。神様がわたしたちを憐れんで滅ぼすのをやめてくださるかもしれない」。それだけではありません。王様みずからきれいな服を脱ぎ捨てて、ほろ服をまとい、王様も大人も子どもも、牛や羊などの家畜も、何も食べないで「神様、ごめんなさい」と心からあやまり、お祈りしました。それをごらんになった神様は、ニネベを滅ぼすのをおやめになりました。神様は、心からあやまり、神様を信じるなら、どんな人でも赦して下さるのですね。

わがまなヨナ

ところが、悔い改めた二ネベを見て、ヨナは怒ったのです。その怒り方も普通ではありません。カッカ、カッカ、もう怒りすぎて死ぬほどでした。「神様！ どうぞ今、わたしの命をとってください。生きるより死ぬほうがましです」と。なぜヨナはそれほどまで怒ったのでしょうか。ヨナには、憐れみ深い神様が二ネベを赦すことがわかっていたのです。思った通りでした。ヨナは、もともとイスラエルの敵である二ネベの人々など滅んでしまえばいいんだ、と思っていました。そこで神様に文句を言いました。「だからわたしは、神様のことは伝えるのが嫌だったのです。それでタルシシに逃げようとしたのです。こんなことから、いっそ死んだほうがましです」と。ふてくされたヨナは町の外に小屋を作って、神様が二ネベの町をどうされるのかを見ていました。すると神様は、ヨナのためにとうごまという植物を生えさせて日陰を作ってくださいました。「これはありがたい、涼しくなった」と、ヨナは大喜びしました。ところが次の朝、神様は一匹の虫を送ってとうごまを食べて、枯れさせました。その上神様が焼けつくような東風を起したので、太陽がジリジリ照りつけました。「せつ

かくはえたとうごまが枯れるなんて、死んだほうがましだ」とヨナは泣き言をいいました。なんてわがまなヨナでしょう。

神様の広い大きな愛

その時、神様は静かにおっしゃいました。「あなたは自分が苦労して育てたわけでもないとうごまが枯れたことを悲しんでいるね。じゃあ、よく考えてごらん。わたしが、二ネベの12万あまりの人々が滅びるのを惜しまないでいられると思うかい？ 彼らは神様を知らないゆえに思いのまま好き勝手に生きているけど、彼らも、わたしが造り、育てた民なんだよ。わたしが彼らを失いたくない気持ちで、あなたにもわかってほしいんだ」と、御心を教えて下さったのです。ヨナは自分にとっては敵である二ネベの人々も神様は救われることを望んでおられることがやっとわかりました。神様の愛は私たちが考えることもできないほど広く大きな愛であることを忘れないでいきましょう。

ヨナのように自己中心な考えでなく、神様の思いに立つて、他の人の救いと祝福を祈る者へと変えられていきましょ。イエス様の愛が私たちに強く迫っているのですから。

♪ヨナのうた♪

(救いの聖歌36)

聖書 マタイ3・13〜17 テーマ 神の心になう者

序論

(石田高保)

イエス様が世に出る前、その道備えをする人物がいました。それはバプテスマのヨハネです。彼はキリストに従う上での模範となります。

一、悔い改めにふさわしい歩み

イエス様が世に出る少し前、ヨハネが荒野に現れて神の言葉を語り出すと、全国から吸い寄せられるように民衆が集まってきました。「らくだの毛ごろもを着物にし、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食物としていた」(4)という格好が、預言者エリヤを連想させます。「悔い改めよ、天国は近づいた」(2)。人々はヨハネが神から遣わされた預言者であると信じ、それぞれ自分の罪を告白してヨハネからヨルダン川でバプテスマを受けました。いわゆる悔い改めのバプテスマで、罪を言い表して神に赦してもらい、そのしるしとして川に身を沈めてきよめたのです。しかし単なる儀式ではないことが彼の言葉からうかがえます。「悔い改めにふさわしい実を結べ」(8)。悔い改めたなら、

それにふさわしい行動をせよ、つまり赦されたことに甘んじて、同じ罪を犯すなどということ。「迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれられると、だれが教えたか」(7)とは厳しい言葉ですが、儀式や宗教的な行いで罪が赦されるのではなく、悔い改めとそれにふさわしい生き方が大事なのだということです。神の前で罪を悔い改めると、神の国ではすごいことが起きます。その罪が完全に赦され、何事もなかったように忘れ去られ、優等生として受け入れられます。このありがたさをつかり心に留めるならば、同じ罪を何度も繰り返さずに済むに違いありません。これが悔い改めにふさわしい実を結ぶということです。さてあなたが繰り返し犯す罪はありますか。

二、キリストを紹介する役目

実は、バプテスマのヨハネを遣わすという預言は、旧約聖書の最後にあるというのは興味深いことです。つまりヨハネは旧約と新約とを橋渡しする人物と言えるでしょう。「わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる」(マラキ4・5、6)、このエリヤが他でもないヨハネであることを、イエス様自身が証ししておられます。

つまりヨハネはイエス様の来る前にやって来て、人々の心を神に立ち返らせる役目を果たしたということです。

これを書いたマタイは、預言者イザヤの言葉が、この時のための預言であることを明らかにしています。「荒野で呼ばわる者の声がある、主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ」(3)。ヨハネはイエス様の道備えをし、人々の心が罪を悔いるように働きかけました。それはイエス様が福音を語るための準備となつたわけです。ヨハネによつて砕かれた人々の心が、イエス様の言葉によつて救いを受け取ることができたからです。しかも「このかたは、聖霊と火によつておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」(11)と言つて、自分の後に来られる方こそ神の子であり救い主であることを預言しています。聖霊の火のバプテスマとは、外面的なことではなく、内面的なことであり、イエス様による生まれ変わり成熟の恵みを指しています。

ヨハネは偉大な働きを担つた人物ですが、私たちにも、ヨハネのような働きをすることができます。「ヨハネはなんのしるしも行わなかつたが、ヨハネがこのかたについて言つたことは、皆ほんとうであつた」。そして、そこで多く

の者がイエスを信じた」(ヨハネ10・41〜42)。これなら私たちでも言つてもらえます。私たちが体験したイエス様については誰でも話すことができるからです。

結論

イエス様が洗礼を受けられた時、天が開け、(これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である)という声がかかりました。このお言葉は、主が間違いなく神の子であることを宣言しています。私たちは、よもや自分に語りかけられた言葉とは考えないでしょう。確かに第一義的には、イエス様にかけられたお言葉であるには違いありません。しかし第二義的には、私たちに語りかけられていることを受け取つてよいのです。自分はとても神の心にかなうような人間ではないことは、自分が一番よく知つていたいでしょう。イエス様のような完全、完璧を基準にしたら、誰もそのようにはいきません。けれどもキリストの血潮のゆえに、罪ゆるされ、神と和解し、神の子とされた人は、神の目には愛する子であり、その存在が全的に受け入れていることを自覚し、愛されて生きようではありませんか。

研究資料

(宮澤清志)

このマタイによる福音書の第3章は、イエスの王(メシヤ)としての即位式に関する記事が記されており、この記事は、共観福音書すべてに記されている(マルコ1・9～11、ルカ3・21～22)。

さて、本日取り扱う記事は、そのバプテスマのヨハネからイエスが洗礼を受ける、いわゆる王の即位式そのものの場面である。ところで、イエスが洗礼を受けられたのはいつ頃のことであろうか。ルカによれば、それはイエスがおよそ30歳のときであったという(3・23)。主の降誕の後のおよそ30年間、聖書ではイエスの幼少期、青年期の出来事については沈黙を守っている。わたしたちは、この沈黙をそのまま受け止める必要がある。この30年は、イエスの人間的成長という面では必要だったのである。

テキスト

13 そのとき 新しい出来事を展開させるときに、マタイがしばしば用いたつなぎの言葉。ヨハネのところにきて イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるといふ明確な目的をもってやってきた。それは、イエスがヨハネのメッセージと

その使命とに同意していることの表明であろう。

14 ヨハネとイエスは、母親同士親戚関係にあったといわれている(ルカ1・36)。しかし、実はイエスとヨハネはここにいたって初めて顔を合わせたようである。ではヨハネはイエスに出会ったとき、どのようにして彼をイエスと認識したのであるか。おそらくヨハネは直感的にイエスを認め、「わたしこそあなたから……」という告白へと至ったのである。それを思いとどまらせようとして ヨハネがイエスに対するバプテスマを躊躇した理由についてはいくつか考えることができる。ある注解者は、ヨハネのバプテスマは悔い改めのバプテスマであり(マルコ1・4、ルカ3・3)、罪のないお方がそのようなバプテスマを受けることは理屈に合わないと言ハネが考えていたからではないかと指摘する。

15 今はこの表現の中に、イエスの強い意志を見ることができ。「今」とは、イエスが公生涯に入るという大切な「今」であって、どちらがバプテスマを受ける資格があるのかと押し問答をしている暇はない、というのである。正しいこと(ギ)デカイオシュネー) この言葉は、いくつかの個人訳の聖書では「義」と訳されている。旧約聖書において、「神の義」とは、神が契約に対して忠実であるという意味を持つ。従っ

て、この原意を端的に示すならば「救い」「勝利」「救し」「解放」など、多様な意味を持つ言葉であり、それは「恵み」にほかならない。「人の義」は、この「神の義」を信じて受けとることが求められる。そこには「神の義」に対する人の側の「服従」「忠実さ」が求められるのである。「すべての正しいこと（義）を成就する」とは、神の御旨に対する服従ということの意味するのである。すなわち「正しいこと」とは神の意志に服従しながら生きていく信仰者のあり方を示しているのである。

16 天が開け この言葉は受身形であり、神が主語であるということが言外に述べられている。多くの研究者は、これを「神の受動態」と呼んでいる。天をお開きになったのは、神ご自身なのである。この言葉の背後には、エゼキエルの出来事が背景にあるのではないであろうか（エゼキエル1・1〜2・2）。エゼキエルが捕囚の地であるケバル川のほとりにいたとき、「天が開け」、神の幻を見、そして神の語りかけを聞いた（1・28）のである。そして、霊がエゼキエルのうちに入った（2・2）のである。このエゼキエルの経験は、イエスの洗礼の経験へと通じるものである。エゼキエルは、この経験をを通して預言者としての活動を開始した。はどのように自分の上

に下ってくる 聖書において、鳩は「平和」「柔和」「素直さ」の象徴であるとされている。また、イエスの洗礼の時に聖霊が下った事實は、これから始まるイエスの公生涯が聖霊に導かれたものであることを強調しているのであろう。

17 天から声があつて言った 天からの声が届くことによつて、見えざる神の御旨が地上に伝達されたことを意味する。ユダヤ人にとってはこの天の声は神ご自身の声を指す。この天からの声こそイエスがメシヤであることを広く人々に知らせる宣言だった。これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である 詩篇2・7とイザヤ42・1からの引用である。子とは、いわゆる血縁関係という意味ではなく、父なる神との関係において父なる神から遣わされ、なすべき働きへと任じられたという意味である。ちなみに詩篇2・7は、イスラエルの歴史において、王の即位式において歌われた詩であり、イエスが王の王、メシヤであることの父なる神の宣言であるといえる。一方イザヤ42・1は、メシヤはしもべであることの意味する。本節に表されるメシヤは、王であり、かつしもべでもあるのである。

参考文献 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New Testament I」 (BROADMAN) 他

聖書

マタイ3・13〜17

タイトル

神様に喜んで頂こう！

暗唱聖句

このように、すべての正しいことを成就

するのは、われわれにふさわしいことで

ある。
マタイ3・15

目標

キリストが残された模範に従い、従順と謙遜をもって生きる。

導入

(飯田勝彦)

夏休みがもう終わっている地域もありますが、ほとんどの学校は今月いっぱいまでで終わりですね。思い出に残る日々を過ごせましたか。今から数日は、必死になって宿題に取り組む人もいるかもしれません。勉強は自分のためですから、やるからには楽しくしたいですね。楽しくないことを、いかに工夫して楽しくやってみて行くかを考えることは、必要です。また、どのようにしたら神様に喜ばれるのかを考え実践することはもつと大切なことです。それは、皆さんの人生を素晴らしく輝かせるものにするからです。

バプテスマのヨハネ

今朝の箇所には、ヨハネとイエス様が登場します。ヨハネ

と言っても、この人はバプテスマのヨハネと呼ばれる人です。彼の生活は少し変わっていました。それは、ヨハネの住んでいる場所は、町や田舎ではありませんでした。人も住まない荒野だったのです。しかも、彼の身なり食べ物も変わっていました。ヨハネの服装や食べ物はどんな物だったと思いますか？ 彼の服は毛衣、ベルトは革の帯、食べ物は野蜜みづでした。ワイルドだろう！

そして、彼の仕事は旧約聖書イザヤ書に預言されていたように、イエス様が来られるための準備をすることでした。彼は「もうすぐ、聖書に約束されている救い主が来られる！だから、悔い改めてバプテスマを受けなさい」と多くの人々に勧めていたのです。ヨハネは、一人でも多くの人が救い主であるイエス様を信じて欲しいと願っていたのです。ヨハネの働きによって、多くの人々が彼のもとに集まって来ました。そして罪を告白し、ヨルダン川で洗礼を受けたのです。でも、ヨハネは「自分は偉いんだ」と少しも思っていないませんでした。ヨハネは自分よりもイエス様の方が素晴らしいお方であることを知っていたのです。

バプテスマを受けられたイエス様

ある時、ヨハネはイエス様を見ました。ヨハネにとってイ

イエス様を見ることができとも嬉しかったです。しかし、そのイエス様がだんだんと自分に近づいてきます。ヨハネの胸はドキドキしたでしょう。実は、イエス様はヨハネに御用があつて来られたのです。それは、ヨハネからバプテスマを受けることでした。これにはヨハネもびっくりしたことでしょう。ヨハネはそれを思いとどめて欲しいと思い「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたがわたしのところにおいてになるのですか」と言いました。

実際、バプテスマとは罪のある者が受けるものでした。イエス様には何の罪もありませんから、このバプテスマを受ける必要はないのです。ヨハネは「きよいイエス様にバプテスマを授けるなんてとんでもないことだ！」と思っていたのです。

でも、イエス様は「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」と言われました。本当なら、イエス様はバプテスマを受けなくても良いはずですが、神様が正しいとされることはすべて実践されたのです。言い換えれば、イエス様は神様に喜ばれることは何でもしたいという気持ちを持つておられ、実際にそれを行われたのです。

ヨハネはイエス様の言われる通りにバプテスマを授けました。すると、天が開け神の御霊がイエス様の所に下つてきて「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者である」と声がありました。

神様はイエス様のことを大変喜ばれたのです。

イエス様はバプテスマだけではなく、十字架で死なれるまで、神様の喜ばれる道を歩んで行かれたのです。

まとめ

イエス様の歩まれた道は、非常に厳しい道でした。それは勝利の道であり、神様の御心に適った道でした。イエス様は、私たちの模範です。イエス様がどのように歩まれたかをもつと知りましょう。そして、イエス様のようにいつも神様に喜ばれることを考え、選び、実行させて頂きましょう。

神様は素晴らしい恵みと祝福を与えられます。そして、私達を神様に喜ばれることを実行する人に、してくださいませ。神様の喜ばれる顔が、皆さんの力となつて行きます。

♪わたしは主の子どもです♪

(ホーリーネス・子どもさんびか88)

聖書 マタイ4・1～11 テーマ 退けるべき誘惑

序論

(金井信生)

イエスはバプテスマのヨハネからバプテスマを受け、宣教の働きを始めようとされます。しかしその前に、荒野で悪魔の誘惑に会われ、これに打ち勝たれました。イエスを信じて救われた者たちも、また教会も同じ試みに会うからであり、どうすればこれらの誘惑に勝つことができるのかを示すためでした。

一、石をパンに変えて見よ―経済的誘惑

悪魔の最初の言葉は、(もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんさい) という誘惑です。イエスは四十日断食しておられ、空腹を覚えておられました。もしイエスが石をパンに変えようと思えばできないことはないでしょう。しかし、この後の福音書を読んでいくと、イエスは、自分の持つ神の子としての力を、一切自分の必要を満たすためには用いません。いつも人の求めに応えられました。

イエスは神の子の力を自分の必要のために用いられないだけでなく、人々の経済的、物質的な必要を満たすためにも用いられません。聖書の時代も今も、飢えに苦しむ人はたくさんいます。荒野に転がる石がパンに変われば、飢える人はいなくなるかもしれません。しかし、経済的に豊かになっても、それで人が幸せになるとは限りません。

現代は、荒野に湧いた石油によって、その国々は豊かになりましたが、争いもまた繰り返されています。イエスが申命記の言葉を引用されたように(人はパンだけで生きるものではなく、神の口からでる一つ一つの言で生きるもの)なのです。

二、宮の頂上から飛び降りて見よ―宗教的誘惑

次の誘惑は、エルサレムの神殿の屋根から飛びおりて見よ、という言葉です。そうすれば、神殿に集まっている多くの人が奇跡を通して、お前を神の子と認め、崇め従うようになるだろうと言うのです。また、神の言葉が、安全を保障してはいませんかと言っています。

しかしこれも福音書を見ると、イエスは奇跡を行っても、むしろ口止めされました。罪の赦しと永遠の命の救

いが誤って受け止められることをとどめるためです。

また、神の言葉を自分の利益のために用いるのは、まったく反対のことです。イエスが『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてあると答えたように、聖書を自分に都合のいいように読むのではなく、神の願いを求めておられるところに従うことが、本当に生きがいのある生き方なのです。

私たちが「主を試す」のではなく、主が「私たちを試して」おられます。私たちは与えられた能力を、時間を、財をどのように使っているでしょうか。主はどれだけ稼いだか、どんなことをしたかではなく、与えられたものに「忠実であったか」を尋ねられます。

三、わたしを拜むなら全世界の栄華をあげよう

—政治的誘惑

イエスはこの後、「悔い改めよ、天国は近づいた」と言って宣教を始められます。悔い改めるのは、まことの神以外を頼りまた支配されていた心であり生き方です。

悪魔は、自らがこの世の所有者であるかのように振舞います。確かに彼は「この世の君」(ヨハネ12・31他)ですが、それは神の許容の中での限定的なことに過ぎま

せん。この世の現実だけに目を奪われて、この世が悪魔の手の中にあるかのような思い違いをしてはなりません。世界は造られた初めから今も、そして最後に至るまで、まことの主である神様がすべて治めておられます。

私たちがみ言葉によって生かされ、主に従うことを喜び、主を崇めるなら、悪魔は退き、天使が私たちの働きを助けます。それは誘惑に打ち勝たせて主の働きに歩むことを助けるためです。

悪魔はさまざまな手段で私たちを誘惑してきます。しかし、「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」(1コリント10・13)と約束されているように、み言葉によって試練や誘惑に打ち勝つ道が備えられています。

結論

主に従う道を選ぶなら、試練や誘惑は必ずありますが、神のみ言葉によって必ず勝利し、主を賛美する恵みがまし加わることをおぼえましょう。

研究資料

(宮澤清志)

この記事は、イエス・キリストが試みにあわれた「荒野の誘惑」の記事である。イヨハネ2・16には、人間の根元的な誘惑として「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」をあげているが、イエスは罪を他ににして、人間と同様に悪魔の誘惑を受け、そしてそれに打ち勝たれたのである。それゆえにイエスは私たち人間を救うことがおできになるのである。イエスがこれらの誘惑に打ち勝たれた武器は、御言葉であり、徹底した神への服従である。

説教に備えるためには、本日の聖書箇所他に、特に申命記の引用箇所も開いて頂き、そのことが語られた背景も思いめぐらしつつ備えて頂きたい。また他の福音書の平行記事(マルコ1・12〜13、ルカ4・1〜13)にも目を通して頂きたい。

テキスト

1 イエスは御霊によって荒野に導かれた この言葉から、この出来事は神ご自身のゆるしの中で起こった出来事であったと考えられる。悪魔(サタン)ディアボロス) 語源としては「間を行き交う者」という意味を持つ。神と民との間を行き交い

ながら、神を人々に誹謗中傷し、人々を神に誹謗中傷する。また人と人との間を行き来し、お互いにお互いを誹謗中傷する。本日の箇所の中では「試みる者」(3)、「サタン」(10)とも呼ばれている。試みられる この言葉は「試み」と同様に「誘惑」とも訳すことのできる言葉である。口語訳と新改訳では「試み」、新共同訳では「誘惑」と訳している。この行為を神の行為として訳すと、神はこの行為を通してご自身の栄光を現されるゆえ「試み」となり、また悪魔の側から見ると、この行為を通して人を破滅へと陥れようとするゆえ「誘惑」となる(ヤコブ1・9〜18を熟読頂きたい)。この箇所においては、「悪魔に試みられる」とあるように、悪魔による「誘惑」の行為である。と同時に神の側から見れば、イエスのメシヤとしてのテストともいえ、この両者が同時に存在していると考えられるのである。

2 四十日四十夜 聖書では「四十」という言葉は試練の期間を表すとされている。たとえばノアの洪水は四十日(創世記7・17)、モーセの山での滞在は四十日四十夜(出エジプト記24・18)、またイスラエルの民の荒野での生活は四十年(申命記8・2)。あるいはイスラエルの兵士がゴリアテの前にして驚き恐れた期間も四十日(サムエル上17・16)であった。その

のち空腹になられた 四十日四十夜の断食の後にすぐに空腹になられたという意味ではなく、この期間の断食の後に空腹がピークになられた、という意味であろう。この聖書のことばを聞いた人々は、モーセやエリヤの同じ経験を思い起こしたに違いない（出エジプト24・18、列王上19・8）。

3～4 第一の誘惑は、石をパンに変えよというものであった。しかも、自らの力でその奇跡を行うようにという要求であった。しかし、イエスはこれを拒否された。それは、神への従順こそがイエスの生きる道であることの告白でもあった。**あなたが神の子なら** 「あなたは神の子であるかないかわからないが、もし神の子なら…」という意味の「もし」ではなく、「あなたは神の子なのだから」という意味である。このことは、既に神ご自身が「これはわたしの愛する子」（3・17）と語られた言葉によって明らかである。「人はパンだけで生きるものではなく…」 この言葉は申命記8・3の引用である。イエスはパンの必要性は認める。パンは肉体の維持には必要なものである。しかし、人は、神の御言葉によって生かされ、養われる。

5～7 次の誘惑は、エルサレムの神殿の頂での誘惑である。これが、現実の誘惑ではなく、幻の中での出来事であろう。

『神はあなたのために御使たちにお命じに…』 この言葉は詩篇91・11～12の引用である。しかし、実はここに落とし穴がある。詩篇の箇所では、本文中に「あなたの歩むすべての道で」（詩篇91・11）という箇所を省いて用いている。聖書のことばを自らに都合のいいように用いることは、悪魔の常套手段であり、古くは創世記3・1のアダムとエバへの誘惑から用いられている。『**主なるあなたの神を試みてはならない**』申命記6・16の引用。イスラエルの民は神を試みて罪を犯した（出エジプト17・1～7）。イエスは、その生涯にわたって父のみ旨に服従する道を選び取られたのである。

8～10 三番目の誘惑は、高い山を舞台に作られた。しかし、この誘惑でも、前の誘惑同様霊的な世界で起こったものであろう。この誘惑は、申命記5・7への挑戦であり、神にささげられるべき礼拝を自らの方に向けることに、悪魔の真骨頂がある。**サタンよ、退け** 消え失せてしまえ、というイエスの強い拒絶がうかがえる。『**主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ**』この言葉は申命記6・13の御言葉の引用である。

参考図書 8月25日分と同じ。

聖書

マタイ4・1～11

タイトル

あなたは、勝利者！

暗唱聖句

サタンよ、退け。『主なるあなたの神を

拝し、ただ神のみ仕えよ』と書いてある。

目標

悪魔からの様々な誘惑を、御言葉によって退ける。

導入

(飯田勝彦)

明日から新しい学期が始まりますね。「学校に行くの嫌だなあ、夏休みが2ヶ月ぐらいあれば良いのに」と思う人もいるでしょう。気持ちは分かりますが、どうせ学校に行くなら楽しく行きたいものですね。今朝、イエス様から新しい力を頂いて立ち上がらせてもらいましょう。

誘惑するサタン

この夏休み楽しいこともあったと思うけど、怖いことはなかったですか。具体的には、悪いことに誘われたり、自分も悪いことをしてしまったらして怖い思いや嫌な思いをしませんでしたか。

世の中には、子どもにも声を掛けて悪い方向に引っ張ろうと

する人たちがいます。それは大人であったり、ときには同じ子どもでもあったりする場合もあります。でもその背後に実はサタンの働きがあることを知っておいてください。サタンは人の心に働きかけて罪を犯させようとします。その目的は、神様から引き離すこと、神様との関係を壊してしまうことです。使徒信条の中に「我は聖霊を信ず」と告白します。聖霊は私たちを守り助けて下さいますが、同時にサタンも私たちを陥れようと躍起になっていることを知っておいてください。サタンは実際に存在します。

誘惑を受けたイエス様

イエス様は神様ですが、私たちと同じ人間でもありました。イエス様が、洗礼を受けたときどんなことが起ったでしょうか。聖霊が鳩のようにイエス様にくださり、イエス様は神様に喜ばれる者とされました。しかし、その後イエス様は、何とサタンの誘惑を受けられたのです。サタとしては、救い主であるイエス様が誘惑に負けることを願っていました。それは、イエス様が罪に陥るなら、人間が救われることもないし、自分も減じられることがないからです。サタンは必ずでイエス様を誘惑しました。

まず、イエス様に石がパンになるように命じたらどうだ、と

誘惑しました。イエス様は四十日も食事をしていかなかったで、腹ペコでした。サタンはそれを良く知ったうえで誘惑したのです。さらには、イエス様を神殿の屋根に立たせて「ここから飛び降りてみる、天使が支えるだろう」と誘惑します。最後にサタンは「自分を拝むならすべてのものを与えよう」とイエス様を誘惑したのです。サタンの誘惑は一度だけではありませんでした。三回もあの手この手を使って誘惑したのです。

サタンの誘惑は、イエス様だけに向けられるものではありません。サタンは、皆さんにも誘惑をしかけてきます。サタンは悪賢く、自分の存在を隠し、まるでゆるやかな坂を下らせるように誘惑して来るのです。

誘惑に勝利されたイエス様

サタンの誘惑を受けたイエス様は、その誘惑に負けてしまったでしょうか。また、誘惑から逃げ出してしまったでしょうか。いいえ、イエス様はサタンの誘惑に完全に勝利されたのです。その勝利の秘訣は何だったのでしょうか。

イエス様がサタンの3回の誘惑に同じように用いたものがありました。それは、聖書の御言葉です。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある、「『主なるあなたの神を試みてはならない』と書いてある」

である」「サタンよ、退け『主なるあなたの神を拝し、ただ神のみ仕えよ』と書いてある」とイエス様は、サタンの誘惑に御言葉で応戦し勝利されたのです。御言葉は神の力であり、剣です。

サタンは、今も働いて神様を愛する者を誘惑し、神様から離れさせ罪の世界に引きずり込もうとしてきました。「礼拝に行かなくても良いよ」「聖書を読まなくても、祈らなくても問題ないよ」「みんな、バレナイように悪いことをやってるんだから大丈夫だよ」と私たちを誘惑して来ます。みんなは、その誘惑にどのように立ち向かいますか。しっかりと御言葉の剣を持ちましょう。御言葉を覚えることは大きな助けになります。

まとめ

イエス様は「あなたがたは、この世では悩みがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」と言われました。イエス様は、私たちが素晴らしい勝利の中に入れてくださっています。

これからもサタンは私たちを誘惑して来ますが、恐れる必要がありません。私たちには御言葉とイエス様の勝利が与えられています。勝利者として大胆に歩みましょう。

♪おおしくあれ♪

(ホーリネス・子どもさんびか106)

聖書 ヨハネ3・1～15 テーマ 新しく生まれる

序論

(福井文彦)

ニコデモは当時宗教的にも社会的にも知識と経験に富む、高い地位を得た、ユダヤ人を代表する人物であった。その彼がイエスを「先生」と呼び、教師として最高級の人物と尊敬していた。しかし、彼にはイエスが人を新生し、霊的命を与えるメシヤ（救い主）であるという認識に欠けていた。

一、ニコデモのイエス理解

ニコデモは「パリサイ人」であった。パリサイ派の人は、ユダヤ教の正統的な信仰を持ち、旧約聖書の権威を信じ、それを実践している立派な人というイメージがあった。また、彼は「ユダヤ人の指導者」、つまりユダヤ人議会の議員でもあった。ユダヤ人議会は、ユダヤ人の政治的議会であり、ユダヤ教の最高の議会でもある。だから、彼は人々から尊敬され、有力で有名な人物でもあった。

彼は自分の社会的立場、人々に対する面子、体裁を考

え、人目を避けて夜こっそりイエスのところに来たと思われる。彼はイエスに会う必要、飢え渴きを覚えて自らイエスを尋ねて来た。彼はイエスを「先生」と呼び、最大級の尊敬の念を込めて教師として認めている。そのお方から教えを得ようと求めて来たのである。

ニコデモはイエスを、「神からこられた教師」、「神がご一緒」である、だれ一人出来ない「しるし」（奇跡）を行うお方と理解していた。彼はイエスの奇跡を見たことによつてイエスを非常に高く評価していた。しかし、彼にはイエスがメシヤであるとの認識に欠けていた。

二、水と霊による新生

そこでイエスは答えて、「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることができない」と言われた。このところで「新しく」と訳されているギリシア語はアノーセンで、「上からの、天からの」という意味でもある。これは神により新しく生まれる、霊的誕生を意味する。人が生まれながらに持っている肉体的命ではなく、神から与えられる霊的命のことである。

ところが、ニコデモにはイエスが「新しく生まれる」

と言われたことが皆目分かいまぐからず、肉体的な誕生のことしか考えつかなかった。彼は、人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいつて生れることができましようか」と、的外れな答えをしている。

そこで、イエスはもう少し詳しく説明された。〈だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない〉。ここで、〈水〉とは、①悔い改めと信仰告白、②み言葉、③御霊を指すと解し、「水すなわち御霊」など考えられる。いずれにしても、水と御霊による心の刷新（根本的变化）とその結果による霊的真理への目覚め、つまり神が与える霊的命を得ることが新生である。

三、新生の説明

イエスはニコデモが聞いた内容に当惑し、不思議に思っている（7）ことに対して、〈風〉を例として用いられた。風は吹いていても、目で見ることはできない。そんな風でも音なら聞くことができるし、そよぐ木々を見れば今風が吹いているのだと分かる。そのように、御霊による新生も、人間の目で見ることができない。しかし、御霊が新生させてくださると、その人の人生がすっかり

変わるので、だれの目にもよく分かるのである。

しかし、ニコデモはまだイエスの言っておられることが理解できなかった（9）。そこでイエスは、イスラエルの民が昔、経験した故事を引き合いに出された（民数記21・4～9）。食物と水の不足に対して民は指導者モーセに逆らった。そこで神は罰として、彼らに毒蛇どくごを送り、それにかませられたので、つぶやいた多くの者が死んだ。民は自分たちの不従順の罪を悔い、モーセにとりなしの祈を乞うた。モーセが祈ると、神は、あの毒蛇と同じ形をした蛇を青銅で作り、それを旗ざおの上につけるように命じられた。そして、毒蛇にかまれ苦しんでいる人が、その青銅の蛇を仰ぎ見ると救われたのである。それと同じように、十字架に上げられたイエスを信じて、仰ぎ見る者はだれでも、救われ、永遠の命が与えられて、神の国に入ることができるのである。

結論

イエスは、だれでも、イエスに対する信仰によって新生し、罪とその結果の永遠の刑罰から自由にされ、永遠の命を与えられて神の国に入ることができることを教えられたのである。

研究資料

(井上義実)

ヨハネによる福音書は、共観福音書と呼ばれるマタイ、マルコ、ルカによる福音書と比べて独自の点が多い。本箇所に登場するニコデモもヨハネのみが記している。

テキストト

1 パリサイ人 パリサイの語源は分離された者たちという意味であるが、何から分離されていたかについては諸説がある。パリサイ人が律法を厳守し、律法にかなわない人々から分離されていたと考えられている。パリサイ人は成文律法だけではなく、口伝律法も同等に受け入れていた。**ニコデモ** (ギ)ニコデモス) 人々の勝利者という意味がある。ギリシヤ名であるが、ユダヤ人には普通に見られる名前である。**指導者** (ギ)アルフォン) 支配者、指揮官などの意味もあるが、ここではサンヒドロリンの議員を指している。地方には小法廷であるサンヒドロリンがあったが、エルサレムの大サンヒドロリンは71人の議員からなる。ユダヤの最高自治機関であり、最高法廷であった。

2 夜イエスのもとにきて 保守派、旧守派のパリサイ人は、宮きよめを行なったイエスを敵視した(ヨハネ2・14

以下参照)。ニコデモはイエスに教えをこう姿を仲間に見せるわけにはいかず、權威ある民の指導者としての外聞もあった。世の光であるイエスの元に、暗い夜訪問したニコデモの姿は、彼の心の闇を象徴している。先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。まわりくどく聞こえる。ニコデモは、ためらいながらも、それを越えて、わざわざイエスに会いに来たのであった。漠然とであったとしても、イエスの内に真実を見出していた。

3 よくよくあなたに言っておく イエスが強調されるべき使う表現で、ヨハネが特徴的に書き残している。ヨハネ福音書中に24回用いられている。新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。ニコデモのあいさつに対して、イエスの答えは唐突に聞こえる。イエスの関心はニコデモの魂にあった。ニコデモの必要を大胆に指摘されている。霊的な新生についてである。新生は神学用語であって、聖書中には使われていない。イエスとニコデモとの対話は、新生の教理を導き出す最有力の聖書箇所である。悔い改めと信仰によって、新生はなされる。「新しく生まれる」は、再び生まれる、上から生まれるとも訳される。内

容的には、再び、神によって、新しく生まれるのである。

4 人は年をとってから生れることが、どうしてできますか ニコデモはイエスの言葉を、この世の規準で測って不可能だと言っている。イエスの言葉は、神の規準で捉えなければならぬ。年令を条件に持ち出すこの言葉から、ニコデモは相応の年配であったと推測される。

5 水と霊とから生れなければ この言葉は多くの解釈を生んできた。旧約聖書に表されている水の働きの重要点は、心の悪や罪を洗い清めることである（エレミヤ4・14、エゼキエル36・25他）。比喻として、水が汚れを洗い流すように、聖霊が心に働いて、新しく生まれ変わることができ

8 風は思いのままに吹く 風は目には見えない。しかし、風が吹く時に音が聞こえ、風の流れる感じることができる。聖霊も目には見えないが、その働きを否定することはできない。風（ギリブニューマ）は聖霊と訳すことが圧倒的に多いが、この文脈では風と訳されなければ意味が通らなくなる。

9 どうして、そんなことがあり得ましようか ニコデモはなお疑問を持った。しかし、ニコデモは疑問を持って

イエスを否定しなかった。イエスの言葉を理解しようと反芻し続けたと思われる。後にニコデモは、イエスに対するパリサイ人の誤った断定を正し（ヨハネ7・45以下参照）、アリマタヤのヨセフと共にイエスの遺体を葬った（ヨハネ19・38以下参照）。

12 地上のことを語っている 新生は神による業であるが、人間の魂の内になされることとして地上のことである。天上のことを語った場合 神のひとり子イエスが人類の罪をあがなうために死に渡され、永遠の命を与えるものとなる。神が備えられた大いなる救いの真理である。

13 天から下ってきた者 言うまでもなく神の子イエスを指す。救いは律法主義者のパリサイ人が主張するように、地上の人間の努力でなされるのではない。天上の神から与えられなければ、人は救いに与れない。

14 モーセが荒野でへびを上げたように パリサイ人が崇敬するモーセの故事が引用される。青銅のへびを仰いだ者のみが救われた。イエスは十字架に上げられることによって救いを成就された。

参考図書 Leon Morris (NICNT), G. R. Beasley-Murray (WORD), 他

聖書

ヨハネ3・15-18

タイトル

イエスを訪ねた学者ニコデモ

暗唱聖句

だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。ヨハネ3・3

目 標

新生の必要を知り、キリストを信じて新生の恵みを頂く。

導入

(松浦みち子)

外国に行ったことあるでしょうか？ その時必ず必要なものがあります。何か知っていますか。パスポートですね。パスポートがないと、日本の国から出ることも、外国に入ることもできません。それでは、私たちが神様の国に入るには、どうしたらよいのでしょうか。何か必要なものがあるのでしょうか。その答えを求め、ある人がイエス様を訪ねて行きましたよ。

イエス様を訪ねたニコデモ

ある夜のことです。一人のおじいさんが暗い夜道を歩いてイエス様を訪ねてきました。ニコデモという名前のとても偉いユダヤ議会の議員でした。町の人々からは「ニコデモ先生は立派な人だ」と言われ、聖書をよく読み、何でも

知っている学者でもありました。しかし、どうしてそのような立派な先生が、イエス様を訪ねてきたのでしょうか。しかも、夜に。ニコデモは、以前からイエス様の教えや病気を治したりなさる奇跡の業を見聞きして、ぜひ、イエス様に尋ねたいことがあったのです。そこで、人目を避けてイエス様を訪ねました。「先生！ あなたのなさるすばらしい業をみれば、先生が本当に神から遣わされたお方だとわかります」と。ニコデモはどうすれば神の国に入れるのかを知りたかったのです。

新しく生まれる

イエス様は澄んだ瞳でニコデモを見つめられ、「よく聞くのだ、ニコデモ。人は新たに生まれなければ神の国を見ることはできない」とおっしゃいました。「えっ、新しく生まれるって？」ビックリしてニコデモは目をばちくり。「イエス様！ こんな年寄りの私がかもう一度、母のお腹に入って生まれるんですか。そんなこと、できっこないですよ」。ニコデモはイエス様のおっしゃったことがさっぱりわかりません。イエス様は、ニコデモの心を見通して、「新しく生まれるということは、体のことではありません。誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない

のです」と言われました。いったいどういふことでしよう。ニコデモはますます、ちんぷんかんぷんです。イエス様は、わたしたちの肉体ではなく、魂が新しく生まれる必要があることを教えられたのです。では、魂が新しく生まれるために必要なことは、何でしょう。一生懸命がんばって良いことをして立派な人になったり、聖書を勉強すれば神の国に入れるのでしょうか。いいえ、自分の力によるのではなく、イエス様を信じてバプテスマを受け、神様の子どもとして新しく生まれることです。それは神様の霊の働きによるのです。皆さんは、風を見たことがありませんね。手で捕まえることもできません。でも、木の葉やカーテンが揺れているのを見たり、音を聞くと、風が吹いているのが分かります。同じように、霊の働きによって人が新しく生まれることは目には見えませんが、その人の生き方そのものが変えられるので、知ることが出来るのです。

見上げて信じる

そこでイエス様は、ニコデモがよく知っている旧約聖書のお話しをされました。それは、神様から遣わされたモーセがイスラエルの人々をエジプトから救い出し荒野を旅していたときのお話しです。つらいことがいっぱいある旅の

中で、人々は神様に不平を言い、逆らったために、神様からの裁きを受けて、多くの人が毒蛇にかまれました。その時、神様はモーセに、「青銅で蛇を作り、それを旗ざおの上につけ人々の前に高く掲げなさい」とお命じになり、「その青銅の蛇を見上げた人は命が助かる」と約束されました。不思議な方法ですね。「何だって！ そんなバカなことあるか」といつて仰がなかった人は毒が回って死にました。しかし、神様のおことはを信じて青銅の蛇を見上げた人は助かったのです。イエス様は「その青銅の蛇のように私はまもなく十字架にかけられます。そして、その十字架を見上げ、信じる人が救われるのです。そのために私は天から下ってきたのです」とニコデモにお話しになりました。「あつ、そーか、神から遣わされたイエス様を信じるなら、神の子として新しく生まれ天国に入れていただけるのだ」と、ニコデモにはわかりました。

あなたもイエス様の十字架を見上げて信じ、永遠の命という天国行きパスポートをいただき、神の国に入れていただきます。そして家族やお友達にこの素晴らしいニュースをお伝えしましょう。

♪じゅうじかわが力♪

(ホ・子どもさんびか115)

聖書 ヨハネ4・4〜26 テーマ 尽きない喜び

序論

(鎌野善三)

先週のニコデモとは対照的に、今週扱う一人の女性は地位も低く、旧約聖書の知識もない、一般庶民である。しかも、ユダヤ人が蔑視していたサマリヤ民族だったが、主イエスはご自分からこの女に近づかれた。それは、罪の中を歩んでいた彼女に、「永遠の命に至る水」を与えるためであった。尽きない喜びを与えてくれるこの水は、以下のようなものである。

一、だれにでも与えられる

ヨハネのみが記す初期ユダヤ伝道を終えて、主は再びガリラヤに戻ろうとされた。地理的には、エルサレムからそのまま北に進めばガリラヤに行けるのだが、その場合は「サマリヤを通過」しなければならぬ。多くのユダヤ人はそれが嫌で、ヨルダン川沿いの遠回りの道を選んでいった。しかし、主があえてその道を通られたのは、この女性に会うためであったことは明白である。ユダヤ人の知識階級に属していたニコデモに必要であった「永

遠の命」は、サマリヤ人の庶民階級の女にも必要であった。

永遠の命は、民族、階級、性別の違いに関係なく、すべての人に必要である。神はそれを与えたいと願っておられるのだ。しかし、昔も今も、多くの人々はそれを知らず、求めようとしない。

二、求める者に与えられる

「時は昼の十二時ごろであった」。乾燥地帯の真っ昼間は最も暑い時である。そんな時間に水をくみに来るのは、人と出会うのをはばかる場合であることは、容易に推測できる。だが主はあえてこの女性に「水を飲ませて下さい」と言われた。ユダヤ人の男性から声をかけられることなど一度もなかったこの女性が驚いたのも無理はない。

なぜ主はこのようなことをされたのか。それは、この女性に自分の必要を自覚させるためであった。18節でわかるように、彼女は過去に五人の夫があつたが彼らと離別し、しかも現在の夫は、正式な夫ではなかった。この時代にそのようなことをする女性は、社会からつまはじきされていたことは確かであろう。その女性に「永遠の

命〉を求める崇高な思いはなかったが、毎日水をくみに来る重労働から解放してくれるというなら、話は別である。だから彼女は最後に、「主よ、わたしがかわくことなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」と言った。

ニコデモの場合と同様、主はこの女性とも対話された。そして、自分に何が欠けているかを自覚させ、それを求めさせられたのである。「求めよ、そうすれば、与えられる」とは、昔も今も共通する基本原則であることを忘れてはならない。

三、主イエスによって与えられる

しかしそこに至るまでには、かなりの時間がかかった。彼女は、「くむ物がないのにどうやって?」「あなたは祖先のヤコブよりも偉いの?」と質問している。この間に、主は「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と答えられた。主は、目に見える水ではなく、永遠の命という水について語られたのだ。それは、主イ

エスしか与えることのできない水である。しかも、その水を飲む者は自分が泉のようになって、他の人々にも水を与えることができるという。何とすばらしいことか。

永遠の命とは、単に死んでから後の命というのではない。それは、地上で生きている時にも、その人からわきあがる喜びの泉である。25節以降には、不道德な生活をしてきたこの女性の生活態度が、主イエスと出会うことによつて一変したことが記されている。人の目を避けるのではなく、自ら進んで人々に、主イエスが「キリストと呼ばれるメシヤ」であることを伝えたのだ。彼女の中に喜びの泉がわきあがったことは否定できない。

結論

キリストに出会うとき、私たちは喜びあふれる生涯へと変えられる。新しい命、永遠の命が与えられるからである。それは人種性別を問わず、おとなでも子どもでも、だれにでも与えられる。ただし、求めようとしないならば与えられない。私たちは、「その水を私にください」という求めをおこさせるように語り、行動していこう。宣教はそこから始まっていくのだから。

研究資料

(宮澤清志)

備えに当たっては、42節までお読みいただきながら、説教への備えとしていただきたい。

テキスト

4 しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかった。この言葉は、ヨハネにおいては神により与えられた道を言い表している。神の必然とでもいべき言葉である。

5 スカル ヤコブの井戸の北東約一キロメートルのところにあるといわれている。

6 旅の疲れを覚えて 主は私たちと同じ肉の体をもち、罪以外は人間としての状態をことごとくとおられた(ピリピ2・6〜11)。時は昼の十二時ごろであった。口語訳は、ユダヤ的な時刻の呼び方(夕方の六時から朝の六時、朝の六時から夕方の六時)に従って、「第六時」を「昼の十二時」と訳している。

9 ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。サマリヤがアッシリヤに滅ぼされ、サマリヤ以外の地域からサマリヤに移住させた外国人と結婚(雑婚)し、ユダヤ人としての純粋性を失ったことから、両者の反目が起こった。

10 神の賜物 文脈から考えると、その次に登場する「永遠の命に至る水」(14)を指すとすることもできる。生ける水 永遠の命に至る水をさす。また神に対する人間の霊的な渇きを根源的にいやす「いのちの水」のこともある。

11 前節の主の言葉に対して、この女性は「生ける水」のことを「わき出る水」としか理解していなかったであろう。

13 この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。主は、彼女の心を、自らが与えようとする「永遠の命の水」へと導こうとされる。その手始めとして、ヤコブの井戸からの水は、たとえ喉を潤したとしても、また喉が渇くものであることを指摘される。

14 わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。主が与える水は ①内面的なものであり、②その人のうちで源泉となるものであり、③永遠の命に至らせる水である。このことは、イエスの使命について、またイエスが何者であるかについて、明確に宣言している箇所である。

16〜18 この箇所から新しい展開にはいる。イエスは自らの真相を明らかにするが、女はまだイエスが与えようとする水の真の意味はわからずにいる。しかし、この水を真に与えら

れたいと願うならば、自らの真相を知ることと罪の悔い改めは、避けて通ることができない。

19 **主よ、わたしはあなたを預言者と見ます** 「あなた（がた）はわたしをだれと言うか」（マタイ16・15）とあるように、まずイエスの本性をわからせることが重要である。

20 **この山** ゲリジム山といわれている。サマリヤ人はアブラハムにならない、ゲリジム山に神殿を築いて礼拝をささげていた（創世記12・6〜7、申命記11・29等）。一方ユダヤ人はシオンの上の山に立てられたエルサレム神殿で礼拝をささげ、そこに神がおられると信じていたのである。

21 **あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する** 主イエスは、福音のもとではもはやエルサレムかゲリジムかといった場所は問題ではなく、どこにおいても父なる神に出会う道を見いだすようになるというのである。

23 イエスはここで、来るべき新約の時代における真の礼拝のあり方を示される。それは、エルサレムかゲリジムかといった場所を越え、あるいはユダヤ人かサマリヤ人かといった人種を越えて、あらゆる場所において、あらゆる人種によってささげられる礼拝である。それは、霊とまことによる礼拝

である。霊 様々な解釈が見られるが、神の霊、聖霊を指すという解釈が一般的である。まこと（ギ）アレーセイア）ヨハネにおいては、アレーセイア（真理）はキリストにおいて表されている。キリストこそ真理そのもののお方である（ヨハネ14・6）。**そうだ、今きている** 福音の時代が到来し、すでに始まったことをイエス自ら宣言している（マルコ1・15）。

24 **神は霊である** 神の中心的な属性（正性質）のひとつ。神が霊であるから、私たちはどこにおいても神を礼拝することができるのである。

25 前節のイエスの言葉にもかかわらず、彼女はまだメシヤ到来を将来的な事柄として捉えている。

26 **わたしが、それである**（ギ）エゴ・エイミ） 神がモーセにご自身を顕された言葉（出エジプト3・14）と同じ言葉を用いて、イエスご自身を語られる。このイエスとの出会いによって、彼女の行動は一変する（27以下に明確に記される）。

参考図書 ビ・エフ・バックストン『ヨハネ傳講義』（バックストン記念霊交会）他

聖書

ヨハネ4・4〜26

タイトル

喜びいっぱい的心

暗唱聖句

わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない。ヨハネ4・14

目標

罪を悔い改め、キリストを信じて、喜びに満ちた生涯を送る。

導入

(飯田勝彦)

今、皆さんが夢中になっている遊びは何ですか？ それをして
 いる時は、もちろん楽しいし、喜びいっぱいでしょう！ でも、そ
 の喜びは、ずっくと続くかなあ。皆さんは、どんな時でも喜んで
 いたいと思うでしょう。どうしたら、嫌なことや悲しいことが
 あっても喜んでいることができるんだろう。その秘訣を知りたい
 よね。

心が渴いでいたサマリヤの女

ユダヤの北に、サマリヤという地域がありました。ある時、イ
 エス様がそこに来られました。「あゝ疲れた。ここで少し休もう」
 とイエス様は、目の前にあった井戸の側に座って休まれたのです。
 それは、ちょうど昼の十二時ごろでした。するとそこに一人の女
 性が井戸の水を汲みに来ました。普通、水汲みは朝にする女性の

仕事でした。朝になると井戸は、多くの人で賑わいました。そこ
 で女性たちは「私の家の牛に子どもが生まれたの」とか、「〇〇さ
 ん結婚するって聞いたけど本当なの!？」と、井戸端会議が行われ
 ていたのです。

でも、イエス様の前に現れた女性は違いました。彼女は人が多
 く集まらない時間をねらって水を汲みに来ていたのです。皆さん
 は「今日は、誰にも会いたくないし、話もしたくない」と思った
 ことがない？ この女性は、そうでした。それは、彼女が大変不
 幸な結婚生活を繰り返していたからでした。それで彼女は、他の
 人の目を避けて生きていたのです。彼女はどんな気持ちで過
 していたでしょうか。皆さんは分かりますか？

彼女の体は井戸の水で、毎日の必要を満たすことが出来たで
 しょう。でも、彼女の心の必要を満たすことは出来なかったの
 です。彼女の心には喜びがなく、渴いでいたのです。皆さんの心は
 今、どのような状態ですか。この女性のように渴いでいます
 か？

「生ける水」を与えるイエス様

イエス様は、この女性に「水を飲ませて下さい」と話しかけられ
 ました。当時、ユダヤ人とサマリヤ人は付き合いをしません
 でした。でも、イエス様はそのようなことはお構いなしに、女性

に近づいて行かれたのです。

皆さんはクラスの中で、嫌がられている友だちに話しかけていますか？「あいつと話すと自分も仲間はずれにされる」と、みんなと一緒に無視してない？ イエス様はどのような人であっても親しく声をかけてくださる方なのです。

イエス様は、この女性と会った時、彼女には何が必要なのか分かりました。それは「生ける水」でした。イエス様は、「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と言われました。

イエス様が与えてくださる「生ける水」とは、イエス様にある真の喜びです。そしてこの喜びは、決してなくならないのです。イエス様は、私たちに失われぬ真の喜びを与えてくださいます。

「生ける水」を求めるサマリヤの女

この女性はイエス様に自分の夫のことを聞かれたことで、自分が罪深い者であることを自覚することができました。そして、彼女は自分のありのままの現状をイエス様に告白しました。罪は、イエス様からの喜びを妨げるものです。その罪を悔い改めるとき、イエス様は私たちに素晴らしい恵みを与えてくださいます。

女性は、生ける水の話聞いて終わったのではなく「主よ、わた

しがかわくことなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」とその水をイエス様に求めたのです。

たとえば、皆さんがマクドナルドに行ったとします。メニューには美味しそうな物がたくさんありますね。でも、店に行っただけではハンバーガーを食べることは出来ません。「ビッグ・マック・セットをください」と自分の欲しい物を、注文しないと食べることは出来ません。

イエス様は皆さんの心に、失われぬ喜び、あふれ出る喜びを与えてくださいます。そして、その喜びは変わることがないので、

皆さんもサマリヤの女性のように自分の罪を素直に悔い改めて、生ける水を大胆に求めてみてください。

まとめ

イエス様がくださる喜びの水が心に満ちるなら、皆さんの顔は輝きます。そして、それが家族や友だちにあふれ流れて、周りの人々を幸せにして行くのです。ぜひ、イエス様を信じて、喜びにあふれさせて頂きましょう。

♪歌い続けよう主の愛を♪ (ホーリネス・子どもさんびか77)

聖書 マルコ1・14～15 テーマ 神の国の福音

序論

(大頭真一)

主イエスは、年およそ30歳で公に宣教の働きを始めた。その時語られた福音とはどのようなものだったのだろうか。まず福音はよき知らせ、グッドニュースであることを十分に理解したい。ニュースとは事実の報道である。信じるかどうかは聞く人次第であるけれども、聞く人の反応に関係なく事実は存在する。第二次世界大戦が終ったニュースを信じないで、30年間ジャングルの中で戦い続けた方がおられたことをご存じだろうか。何という悲劇だろう。

一、時は満ちた

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創世記3・15)という御子の派遣の約束以来、繰り返し返されてきた神の恵みの支配の預言はついに実現した。その時がきたの

である。

時は満ちたのは、神がそのイニシアティブを取って満ちさせられたからである。神は損なわれた世界を回復するために主イエスを遣わされた。時が満ちたから主イエスが来られた、というよりもむしろ、主イエスが来られたから時が満ちたのである、と覚えたい。「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる」(1・7)と言ったバプテスマのヨハネは、自分が時が満ちる直前の人であることをよく知っていた。

〈時は満ちた〉の持つ圧倒的な勝利の響きに注意したい。次の〈神の国は近づいた〉に見られるように、神の国は始まったけれども完成していない。けれども、新約聖書において支配的なのは「始まった」の響きである。決定的に新しい時代が到来した。主イエスが来られた世界はもはや以前の世界と同じではない。だから救いは今、ここで可能なのである。

二、神の国は近づいた

神の恵みの支配である神の国が始まる以前には、人々はサタンとその悪の力の支配の下にあった。罪と悪魔の圧制からの救いこそが神の国のもたらす現在の実である。

る。しかし、この解放のために御子の十字架があつたことを忘れてはならない。「…それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によつて滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となつていた者たちを、解き放つためである」(ヘブル2・14～15)とあるように。

始まつたけれども完成していない神の国において、死はいまも存在する。しかし永遠の命は死を超え、誘惑は今も存在する。けれどもキリストと一つにあるならば、私たちは罪から守られる。病の床も悲しみに終わらず、賛美と証の祭壇となる。このように、私たちは完成へ向かう世界の中で苦しみつつ喜び、歌いつつ痛む。そうしている内にも神の国は成長している。そしてやがて主が再臨なさるときに、損なわれた世界に完全な回復が訪れるのである。

三、悔い改めて福音を信ぜよ

ここに福音の宣言は単なる宣言にとどまらず、私たちへの招きとなる。すでに始まつた神の国へ飛び込むようにと主はお命じになるのである。

神の主権は人間の自由な応答と共存する。救いは一方的な神の恵みでありながら、私たちの側の応答なしには

成立しない。これがアルミニウスやウエスレーの信じた神人協働説である。つまり、もしだれかが滅びるならその責任は神ではなく、招きに応答しなかつた人間の側にある。

招きへの応答は悔い改めとイエス・キリストへの信仰である。(悔い改め)(ギ)メタノイア)は心の向きを転換するという意味をもつことば。自分の罪に気がつき、赦しを乞うて、これまでの自分中心に生きてきた生き方を神中心に転換することである。悔い改めと信仰を切り離すことはできない。「罪を悔いて赦しを求めるときをしなければ、神を信頼して生きることができない」(内田和彦著『キリスト教は初めて』という人のための本」90頁)からである。

結論

今日の箇所直後、16～20節にはシモン・アンデレヤコブ・ヨハネの4人の弟子への召命と彼らの即座の服従が描かれている。もちろん、これは彼らだけのことでない。福音を聞くすべての人は、このように主イエスを信じて従うことを期待されているのである。

研究資料

(宮澤清志)

「キリストは何を語られたか、何を教えられたか」と問われて、答えに窮する人は意外に多いのではないだろうか。内容豊かな福音書の中で「では、キリストは何を語られたか」と問われた時、ひとりで「こうです」と語ることができるようになりたいものである。この箇所は、その問いに答えうる箇所である。主イエスのお言葉の中心にあったもの、主イエスの働きの中心にあったことも皆この言葉に尽きると言ってもよい。

テキスト

14 **ヨハネが捕えられた後** 直訳は「ヨハネが引き渡されて後」。ヨハネの時代が終わり、イエスの時代へと至る連続性が語られる。**ガリラヤ** イエスの宣教の中心地。**神の福音** イエスが宣べ伝えたのは「神の福音」であった。神の福音とは「神についての福音」と理解することもできるが「神から与えられた福音」と理解する立場の方が多い。**福音** については後で述べる。

15 **時は満ちた** 神が定められた時が到来した、という意。すなわち旧約におけるご自身の約束が成就するため

に、神が定めておられた時が到来した、という意味である。**時** とは[ギ]カイロスという言葉である。この「時」とは、神の計画の中で定められている終末の救いの「時」であり、「正しい時」「適切な時」「好ましい時」「ある定まった時」「危機の時」「最後の時」といった意味を持つ。新約聖書では、「満ちる」の他に「完了する」「成就する」「完成する」「実現する」といった意味に訳されている。イエスは「あなたがたは、(旧約)聖書の中に永遠の命があると、思つて調べているが、この(旧約)聖書は、わたしについてあかしをするものである」(ヨハネ5・39)と語られたように、旧約聖書はキリストの来臨を預言している書なのである。その旧約聖書がキリストの到来を通して実現成就したという宣言なのである。**神の国は近づいた** 「神の国」とは、人間が考えるような理想郷(ユートピア)や、空のかなたにあるといったものではなく、神の恵みの支配を指す。神が王として支配することであり、神の栄光、神の正義、神の平和、神の救いが満ちているところである。その神の恵みの支配が「近づいた」と語るのである。この「近づいた」を、到来した、という意味に解する説もある(実現された終末論)。「時が満

ちた」のであるから、神の支配も実現したというのである。またこの「近づいた」を、将来のことと理解する説もある（徹底的終末論）。しかし、ある学者は、この言葉に「イエスの到来によって、神の恵みの支配が始まった。しかし、それはもう一度イエスが来臨なさる時に完成するのである」（開始された終末論）という考えを示した。聖書にはその両面が記されている。イエスの到来によって、確かに神の国は現実のものとなった。しかし同時に、この神の国はキリストの再臨によって完成するものであって、聖書はこの両者を語っているのである。悔い改めて福音を信ぜよ もう一つ、イエスが主張されたことは悔い改めと信仰である。イエスのメッセージの中心は「神の国」であり、その神の国に入るために必要な条件が「悔い改めと信仰」ということである。「悔い改め」とは、原語的な意味としては「よい方へ（あるいは悪い方へ）心を変える」という意味である。新約聖書では、人間の生きる姿勢全体の転換を表し「明らかにされた神の姿に合わせた生き方を取る」という意味として用いられる。すなわち「悔い改める」とは、生き方の一部の手直しではなく、生き方全体の方向転換を意味する。また、悔い

改めの対象は、罪の結果に対しての悔い改めではなく、罪そのものに対しての悔い改めを指す（マルコ1・4）。この点、後悔とは決定的に異なる。この悔い改めが神の民とされるための消極的側面であるのに対して、「福音を信じる信仰」という側面は神の国への積極的側面であると見えよう。「福音」とは、古典ギリシャ語では、よい知らせをもってきた者に対する報酬という意味で用いられた。しかし、後にはよい知らせそのものを指して用いられている。イエスが宣べ伝えた神の国は「よい知らせ」（福音）であり、マルコはこの「よい知らせ」（福音）がイエス・キリストによってもたらされたものであり、何よりもこの福音はイエス・キリストそのものであると語るのである。そして、そのイエス・キリストを私にとつての「よき知らせ」（福音）として信じる信仰が、神の国に生きる民には必要なのである。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New Testament I」(BROADMAN)、小林和夫「栄光の富Ⅱ」(日本ホーリネス教団出版局)、他

聖書

マルコ1:14、15

タイトル

あなたは招かれています！

暗唱聖句

時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。

目標

マルコ1:15

悔い改めと信仰により、神の国の恵みに入る。

導入

(飯田勝彦)

バプテスマのヨハネから洗礼を受けられたイエス様の上に、聖霊が鳩のようにくだりました。イエス様は、上から力で満たされました。そして、悪魔サタンの誘惑に勝利され、大胆に宣教を開始されたのです。イエス様の生涯は、いのちがけで宣教された生涯でした。

時が満ちた

その最初の言葉は、「時が満ちた」でした。これはどういう意味でしょうか。皆さんの中で「時が満ちる」と言う言葉を使いますか？ 例えば「時が満ちたから学校に行く」「時が満ちたので卒業しました」と言いますか？ あまり言わないですね。この言葉は、「神様の約束された時が来ました」と言う意味です。

私たちはみな、罪人です。罪は、最初の人間アダムとエバが神様の約束を破った時から、私たち人間が内に持っているものです。ですから、「僕は罪を犯したことがあります。悲しいけれど皆さんが「オギヤー」と生まれた時から心の中に罪をかかえているのです。神様は、アダムとエバが罪を犯した時から、罪人である私たちを救おうと計画しておられました。しかし、イエス様が来られるまでは、その救いの実現の時はまだ来ていなかったのです。イエス様が来られることによって、救いの時がやって来たのです。イエス様もそのことをよくご存知でした。時が満ち、神様の救いの約束の時が来たことで、今、私たちはイエス様による救いを頂くことが出来るのです。

神の国は近づいた

続けてイエス様は「神の国が近づいた」と言われました。皆さんは神の国ってどのようなところだと思いますか？ 綺麗な景色や美味しい食べ物、楽しいゲームがいっぱいあって、いつまでいても飽きないところでしょうか。この神の国とは、神様の恵みが満ちているところなのです。イエス様は、神様の恵みに満たされた人でしたので神の国は

イエス様の中にあります。ですから、イエス様を心に受け入れる人の中に神の国は始められるのです。何と素晴らしいことでしょうか。イエス様は、罪に苦しんでいる多くの人々を神の国に招くために宣教されたのです。神の国は近づきました。皆さんは、神の国に入っていますか？

悔い改めて福音を信ぜよ

神様の恵みがあふれている神の国は、イエス様によって始まりました。イエス様は皆さんのことも、恵みで満ちた神の国に招いておられるのです。

では、どのようにしたら神の国に入ることができるのでしょうか。それは、イエス様が言われたように、「悔い改めて福音を信じる」ことです。神の国に入っていない心は、罪でいっぱいです。私たちは心にあるものが口から出て来ます。また、心の中にあるものが行動となります。もし、皆さんの心の中に、友だちに対して「あの人なんていなかっただらいのに」という思いがあるなら、口からはその友だちに対する悪口が出て来たり、友だちをいじめたり、無視したりという行動が出て来たりします。罪があると友だちを傷つけるだけでなく、自分も傷つき苦しんでしまいます。ですから、自分の罪を正直に神様の前に悔い改める必要が

あるのです。悔い改めるとは「方向転換」することです。今まで神様に背を向け、罪の道を歩んで来たことをお詫びして、180度方向転換するのです。そして、私たちの罪のために十字架で命を投げ出し、3日目に死の力を打ち破ってよみがえられたイエス様を心の中で信じ受け入れるのです。皆さんの心の中には罪がありませんか？「心の中はだれも見ることが出来ないので安心だ」と思っていますか？でも神様だけは、皆さんの心を見ておられるのです。悔い改めない心は、恵みが満ちあふれているのではなく、罪でドロドロになっています。しかし、罪から自由にしてくださるイエス様を信じ受け入れるならば、イエス様が私たちの心に住んでくださるのです。その時、イエス様があつて神の国は私たちの中に始まっていくのです。イエス様は一人でも多くの人たちが救われて神の国に入れるように宣教をされたのです。

まとめ

皆さんの心はイエス様の恵みで満ちあふれていますか？罪を悔い改めてイエス様を信じましょう。イエス様は、皆さんを神の国に招いておられます。

♪主にしたがいゆくは♪ (日キ・こどもさんびか53)

聖書 ルカ5・1～11 テーマ キリストの弟子として

序論

(金井信生)

ガリラヤ湖の漁師だったシモン・ペテロがイエスの招きに応じて弟子となりました。その第一歩は御言葉に聞き従うことと、自分が罪深い者であることを認めることから始まりました。

一、**沖へこぎ出し、網をおろして漁を試みなさい**
 イエスが湖畔に立つておられたとき、漁師たちは夜通しの漁を終えたところで、網を洗い、繕っていました。また舟を沖に出すには労力が入りますし、網を降ろせば、魚が取れても取れなくても、また網を洗い直し、繕い直す手間がかかります。

初め、イエスが少しこぎ出すように頼んだときは、先にシモンのしゅうとめの病をいやしていただいた感謝もあり、気安く引き受けたことでしょう。群衆に声が届くように手を止めて舟を出すことで、イエスの働きを手伝う、お役に立てたと思ったかもしれませぬ。

しかし、続く〈沖へこぎ出し、網をおろして漁をして

みなさい〉との言葉はどうでしょうか。舟を出して漁をするのは、漁師の領分です。イエスに対する感謝と信頼があっても、自分の世界に入り込まれることを受け入れるのか、受け入れないのか、そこがイエスの弟子となる分岐点でした。

シモンはへしかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」と答えました。舟に乗り、間近で聞いていたシモンの心に、イエスの言葉は届いていました。昔、神がこう命じられたから従いなさいではなく、今、生きて目の前におられるお方との交わりの中で、従う決心が与えられました。

そして従った結果が、網が破れそうになり、船が沈みそうになるほどの大漁でした。シモンは、イエスの言葉に従った時に得られる祝福があることを学び、証しする者へと導かれていきました。

二、わたしは罪深い者です

シモン・ペテロは、舟を下りると主イエスの足もとにひれ伏し、〈わたしは罪深い者です〉と告白しました。

ペテロが自分を「罪深い者」と言ったのは、舟を出してはみたものの、漁について素人であるイエスの言葉を

まともに信じていなかったこともあるでしょう。

また、「異邦人のガリラヤ」と見下され、パリサイ派や律法学者たちからは、清くない者とされている自覚もありました。

何よりも、ただならぬ力を持っているイエスの存在に打たれ、「先生」ではなく、「主よ」と、神の前に出る恐れを感じました。

もともと、漁をできることも、得られた収穫も、すべて神の恵みであるのに、いつしか自分の力でやっているかのように思ってしまうやすい私たちです。そして、神を信じる者といひながら、神の立ち入ることを拒んでいた自分の領域を持つていることは、深い罪です。イエスを預言者や教師としてではなく、全世界を治めておられる主と認めていなかったことが罪であることをペテロは自覚し、悔い改めました。

三、人間をとる漁師になるのだ

イエスはペテロに「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」と語られました。人間を生け捕りにする者、すなわち、迷いの中、罪の中にいる人を主のもとに導き、生き生きとした人生に歩ませる働

き人になるようにとの言葉です。

ペテロは、「いっさいを捨ててイエスに従」いました。それはまず、ペテロ自身がイエスにとらえられたからです。夜通し働いて一匹も魚がとれなかったのに、イエスが共に乗り込まれ、その言葉に従ったときに、大きな祝福を得ました。

お金のためとか自分の満足のためだけに生きるとき、私たちは自分も、まわりの人も失ってしまいます。これまで何のために生きているのかわからず、これからどうやって生きていくことができるのか不安をおぼえることの多い私たちですが、イエスに従い、共に歩むなら、どんな立場であっても「人間をとる漁師」になることができます。その収穫は共に主を喜ぶ仲間が増えていくことであり、永遠に残るものです。

結論

主の救いがなければ、空しい日々を送ることしかできず、神の御心にそむくことの多い者であることを認め、そんなものを招いて尊い働きに用いてくださるキリストに従いましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

1 群衆が神の言を聞くこととして押し寄せてきた。「神の言」は前章の「神の国の福音」(4・43)のこと。それを聞くために来るのは良い態度だが、それだけでは十分ではない(8・4～15参照)。シモンのような主体的な応答が不可欠である。**ゲネサレ湖** ガリラヤ湖のこと(マルコ1・16)。

2 **二そうの小舟** 漁師たちは大きな網を用いて効率よく漁をするために、普通2そう以上の舟を用い、チームを組んで働いた。舟からおりて網を洗っていた。漁を終えた後は、たとえ不漁でも、次回に備えて網を洗い、繕っておく必要がある。た。

3 **シモン** 彼は先に、そのしゅうとめの高熱をイエスに癒してもらっている(4・38～39)。イエスはそれにより込みにお教えになった。押し寄せてきた群衆が多く、適度に距離をとる必要があったのであろう。さらにその状況は、音響的に円形劇場のような効果をもたらし、イエスの声をずっと聞きやすくしたと考えられる。日頃はシモンたちが魚をとる舟の上で、イエスはこのとき「人間をとる」(10)働きをされたの

である。

4 **沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい** 前節の「岸から少しこぎ出させ」に対し、ここは「沖へこぎ出し」とあるのを、ユダヤ人宣教と異邦人宣教の対比としてとらえる解釈もある。

5 **先生** 一般的な教師(ギ)ディダスカロス)ではなく、ここでは[ギ]エピスタテース(主人、上に立つ者の意)が用いられている。ルカは前者を客観的な「先生」の意味で用いるのに対し、後者は、相手の権威に対する主観的・個人的な感服が内包されている表現である。**夜通し働きましたが、何も取れませんでした** 魚の捕れやすい夜間でも不漁であったのだから、日の昇った今では尚更捕れるはずがないという気持ちがあるに表れている。**お言葉ですから** イエスの言葉に内在する権威を指し示す表現。イエスの言葉を間近で聞いたシモンは、半信半疑の中にも、しゅうとめにも癒しをもたらしたその言葉に得も言われぬ権威を感じ取っていたのだろう。網をおろしてみましよう。当時のユダヤ社会では、教師がその専門分野について命じるときには従うべきという風潮があった。裏を返せば、そうでないことについては従う必要は無かったのである。シモン・ペテロはプロの漁師であったのに対し、イ

イエスは彼の目には素人であった。それゆえ、この応答は、自発的な側面も含まれる、ある種の服従と見ることができよう。

6〜7 おびただしい魚の群れ…網が破れそうになった…もう一つの舟…両方の舟いっぱい…舟が沈みそうになった このように奇跡の素晴らしさが複合的な表現を用いて証言されている。このようなイエスによる増殖の奇跡は、旧約に前例を見出し得る（出エジプト8・6、列王下4・1〜7等）。

8 主よ [ギ]キュリオスは一般的な「主人」をも意味し得る語であるが、ここでは1・43や2・11のような「いと高き主」を意味するであろう。わたしから離れてください。わたしは罪深い者です この罪意識は半信半疑で従ったことに対する後ろめたさかもしれないが、イエスの神的な權威に圧倒されたシモンは、自分の罪深さを認めるしかなかったのである。神の臨在に触れたとき、あのイザヤでさえ絶望の叫びを上げざるを得なかった（イザヤ6・5）。イザヤの場合と同様、ここもまたシモンにとつての召命の場面となった。

10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネこの3人は8・51、9・28でも揃って登場する。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ その言葉によって万物を支配されるイエスが宣言するならば、それを成し遂げるためのすべ

での力も添えて与えられ、それは実現する。なおここでの漁師は[ギ]ゾーグローで、直訳すると「生きたまま捕らえる者」の意。エレミヤ16・16を想起させる表現だが、そこで描かれる情景が差し追ったさばきであるのに対し、ここでは主題がそのさばきからの救いへと移り変わっている。神のみ心は、さばきではなく、救いにあるのであり、それゆえ、恐れることはない」とシモンに語られたのである。イエスが命じるならば、恐れさえも消え去る。モーセやダビデがその使命を果たす上で、かつて羊飼いであった経験が役立った。同様にペテロが新しい使命を遂行する上で、主は漁師としての彼の経験をも用いてくださるであろう。

11 いっさいを捨ててイエスに従った 漁師は平均以上の収入を期待できる職業であったようである。それを捨てるならば、経済的にマイナスの影響を覚悟せねばならない、それは新しい出発に向けての根本的な服従を意味する態度であった。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫 (新聖書注解 新約1)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ルカ5・1〜11

タイトル

イエス様に従おう

暗唱聖句

そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いつさ
いを捨ててイエスに従った。ルカ5・11

目 標

自分の無力と罪深さを覚え、キリストに
従う者となる。

導入

(飯田勝彦)

皆さんにとって「カッコイイ生き方」ってどんなものだと思いますか？ 苦しい時でも、目標を見失わず困難を乗り越え真つ直ぐに生きる人生ってかっこよくないですか。皆さんの周りにそのような生き方の人がいますか。一度限りの人生、一つのものに人生をかけて力強く、大胆に生きる者とされたいですね。

イエス様に従ったペテロたち

聖霊に満たされたイエス様は、神様の素晴らしい恵みを多くの人々に伝えるため、イスラエルの各地を回っておられました。そして多くの病人や汚れた霊に取りつかれた人を癒すなど、人々がびつくりするような奇跡も行われました。イエス様の噂は広まり、人々がイエス様のもとに大勢

集まるようになりました。それは、イエス様の祈りの時間にさえ割り込んでくるほどまででした。

ある時イエス様は、ゲネサレテ湖畔に立つておられると、大勢の群衆が神の言葉を聞こうと押し寄せてきました。イエス様はペテロの舟に乗り、そこから群衆に話をなさったのです。その後ペテロに「沖に漕ぎ出して、漁をしなさい」と言われます。しかし、漁師であるペテロは「イエス様、俺たちは一晩中、漁をしたけど取れませんでした。でも、イエス様が言われるなら」と、半信半疑で網を下ろしてみると、グツと重い手応えを感じました。ペテロが仲間を呼び、網を引き揚げると舟が沈みそうなほどの大漁だったのです。

この出来事には皆が驚いてしまいました。するとイエス様がペテロたちに「人間をとる漁師になるのだ」と言われ、彼らはイエス様に従って行きました。しかも、すべてを捨ててイエス様に従って行ったのです。

イエス様に従う祝福

ペテロたちはすべてを捨ててイエス様に従いましたが、どんなものを捨てたと思いますか。仕事、自分の持ち物、家族、仲間、故郷などいろいろと上げることができるでしょ

う。ペテロたちは、すべてを捨ててもイエス様に従って行くことに価値を見つけたのです。彼らの人生は、どうなったのでしょうか。すべてを捨ててしまったので、貧しく惨めな人生になったのでしょうか。それとも、神様の祝福をいっぱい受けた素晴らしい人生を歩んだのでしょうか。

その後、ペテロたちはイエス様の弟子とされました。イエス様と寝食を共にし、多くの人々に神様のこと救いのことを伝えて回りました。しかし、未熟なペテロたちは、時々、失敗をしてしまうこともありました。イエス様が十字架にかかる直前、ペテロがイエス様のことを知らないと言い、また他の弟子たちは、十字架にかけられたイエス様のもとから逃げ去ってしまいました。でも、イエス様は復活されて彼らに現れてくださいました。さらには、聖霊が彼らの上に降り、復活のキリストを喜んで証する者に変えられたのです。彼らはイエス様に従って祝福された人生を送ったのです。

イエス様は、あなたを選ばれる

イエス様は「あなたにもペテロたちのように、わたしに従って来なさい」と言われます。「僕は何も役に立たないからダメです」と思わないでください。イエス様が選ばれ

たペテロたちは、強く優秀な人ではありませんでした。ペテロは、イエス様の言葉に半信半疑であり、罪深い者でした。しかし、イエス様は、イエス様を主と認め、また自分の罪深さに気付いた彼をあえて選ばれたのです。

イエス様に従って損はありません。実際、多くの人々がイエス様に自分の人生のすべてをかけて従い、最高の人生を歩んでおられます。すべてを捨てて従っていくなら、イエス様が必要なすべてを与えてくださいます。また、「イエス様に従っていきます」と踏み出す者に、イエス様が力強い御手をもって助けを与えてくださいます。

イエス様を知らずに罪の中で苦しんでいる人が多くいます。その人たちのために、イエス様はあなたを必要としておられます。

まとめ

皆さんは、イエス様にただついて行く群衆ですか？ それとも弟子ですか？ イエス様は、弟子を求めておられます。イエス様に従う喜びを祝福を体験させて頂きましょう。

♪主よ、みあしのあとを♪

(ホーリネス・子どもさんびか105)

牧羊ひろば



垂水教会

幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのようなる国である。

マルコ10・14

●垂水教会は、一九三〇年（昭和五年）に日本伝道隊御影聖書学舎が垂水区塩屋に移り、伝道が開始されました。今日まで、歴代牧師の精神を受け継ぎ、伝道と教会音楽に励み、主に仕えています。

教会学校の働きについてですが、次代を担う子ども達への信仰継承のため、長期方針を掲げて、取り組んできました。1. 生徒を受洗にまで導き、その後の信仰生活の助けをする。2.

大人の礼拝に導く。3. 生徒が教会の一員（二十一世紀の垂水教会を背負う）としての自覚を持つまで導く。4. 小学校（分校を含む）から中学校へ確実に導く。5. 生徒を通して家族への伝道です。これから教会学校の活動内容を紹介させて

いただきます。

●教会学校（本校）

毎週、八時四五分から一〇時まで、幼稚科・小学校・中高校と三区分にして、垂水教会で礼拝をしています。教師は教職二名、信徒教師七名です。礼拝は、ピアノで奏楽をして、OH P（オーバーヘッドプロジェクト）を用いてスクリーンに歌詞を映写します。礼拝は前奏、賛美、主の祈り、交読文、メッセージ、献金、お祈りの典型的な進め方です。献金は、子どもたちに献金袋を持たせ、彼らが献金感謝のお祈りをささげます。祈りの言葉が出ない時は、教師が先に祈ってあげて、生徒はそれに従って、お祈りをささげます。お祈りのささげ方を覚えて、人前で祈る習慣を身に付けるための訓練にもなっています。礼拝後は分級を行い、小学校は三グループ（小学一～二年、三～四年、五～六年）に別れて進めます。小学校担当の教師は、生徒たちとメッセージの分かち合いや子供たちの一週間の出来事などを聞いたりして、親交を深め、信仰のケアにあたります。月に一度、礼拝後に教師会が開かれるので、その時に、各分級担当の教師は子ども達の様子を報告し、子どもたちの信仰や生活の状況を共有し合い、意見を集

結させて、さらに効果的な働きができるように努めます。

分級の進め方は牧羊者のワークに沿って行います。大半の生徒は片親か祖父母のどちらかがクリスマスチャンですが、両親が全く礼拝に出席してなくても、教会学校に来ている子どもも少数ですがいます。

中・高等科の礼拝順序は小学科とはとんど変わりませんが、ギターを用いて、ワーシップソングを歌います。礼拝後は椅子の配置を替えて、みんなで輪になり交わりと祈りの時をもちます。礼拝のメッセージについて分かち合ったり、近況報告をし合って、主にある親交を深めるように努めています。また高校を卒業したら、教会学校から大人の礼拝に移るので、中・高等科の教師は橋渡しの役割として責任を自覚しつつ、聖霊の助けと御言葉に委ねて、奉仕をしています。

●分校

私たちの教会は、分校を三ヶ所で行っています。二年前に



C S本校クリスマス

は男子高校生が自ら礼拝に出席するようになり、クリスマスに洗礼を受けました。教会に導かれたきっかけになったのは、小学生の時に分校に来ていたからです。その時は教会を挙げて、分校の働きの重要性を再確認し、救いの喜びに浸りました。

I. 大町分校

毎週水曜日、午後三時三〇分から四時三〇分まで、教会近くの幼稚園の一室を借りて行っています。担当は教職の伝道師です。幼稚園の前園長が熱心なクリスマスチャンだったことで、昔から会場を提供してくださり、長年にわたって分校の働きが継続されてきました。幼稚園の隣には小学校があり、分校に行ったことのある卒園した子ども達はほぼ全員、その小学校に入学します。分校の会場が公共の幼稚園ということも相まって、小学生たちが分校に集まってきました。

大町分校のプログラムはI部が礼拝、教職がギターを弾いて、前奏、賛美、主の祈り、交読文、賛美、紙芝居を用いたメッセージ、お祈り、賛美、最後にワークをしています。その後は、室内でゲームをしたり、外のグラウンドでボール遊びをしたり、かけっこや鬼ごっこ等で一緒に遊びます。今、参

加している子ども達は、男の子なのでサッカーやキャッチボールを大人と遊べるのが楽しみのようです。低学年の時から何年もほぼ毎週、分校にきてくれる高学年の子ども達は、教会に対する理解や信頼もあり、時々、友達を連れてきてくれます。また春や秋に催される垂水教会での子ども大会にも積極的に参加してくれれます。

II. 上高丸分校

毎週土曜日、午後三時から四時まで、近くの市営集合団地の中庭で行っています。一人の姉妹が二十年以上も同じ場所で、働きを続けています。分校の進め方は大町分校と同じです。今は数年間ほぼ毎週出席してくれる生徒がいます。二年前に、この分校出身の男子高校生が洗礼を受けました。

III. 滑(なめら)分校

毎週水曜日、午後三時から四時まで、近くの公園で行っています。上高丸分校と同じ姉妹が長年担当しています。進め方は前項と同じです。他の分校とは違い、足を運んでくれる子どもは毎回変わります。天候の悪い時や学校で行事があれば、公園に子どもがおらず、生徒数がゼロの時もありますが、

倦まず弛まず働きを続けています。

分校の課題は、生徒たちの両親が未信者なので中学に進学してから本校の教会学校につながるのが難しいことです。「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである」(伝道11・1)のみ言葉を実感させられる働きではありませんが、「御言には、あなたがたのたましいを救う力がある」(ヤコブ1・21)という真理を信じて、聖霊の助けによって御言葉を宣べ伝える働きを継続していきます。

●特別行事

定期集会以外の教会学校の特別行事を紹介いたします。四月・教区CS研修会 五月・母の日、研修 六月・花の日、交番、消防署に花束を届ける。幼・小学科子ども大会 七月・夏期の行事の準備、幼稚科夏期学校(未就児対象)、これは土曜日の午前前から教会に集まり、紙芝居、メッセージ、ゲーム、昼食、工作などを行う日 帰りの行事 八月・教区中高科パイブルキャンプ 九月・牧師より研修



C S幼稚科一日夏期学校

一〇月・牧師より研修 十一月・牧師より研修 十二月・幼小中高クリスマス祝会 一月・牧師より研修 二月・牧師より研修 三月・進級卒業式

●小学科サマーキャンプ(二泊三日)

一日目：午前はキャンプ施設へ移動、オリエンテーション、午後は賛美タイム、開会礼拝、分級、おやつ、自由時間、おふる、夕食、映画会、就寝

二日目：午前六時起床、朝のお祈り、ラジオ体操、朝食、そうじ、賛美タイム、礼拝、分級、ハイキング出発、午後・キャンプ場帰着、おやつ、自由時間、おふる、夕食、賛美とお話、キャンプファイヤー、就寝

三日目：午前六時起床、朝の祈り、ラジオ体操、朝食、そうじ、賛美タイム、開会礼拝、分級、午後・昼食、キャンプ場出発、垂水教会に到着して解散

●幼・小学科子ども大会(六月・十月)

春と秋に子ども大会を開いています。時間は土曜日午後二



C S 幼小科クリスマス祝会

時から四時です。毎回の子ども大会でメインの食べ物を用意します。六月はアイスクリーム、その他、ポップコーン、綿菓子などです。トラクトにこれらのメインの食べ物大きく載せて、子ども達にアピールします。大会の一週間前には、近所の二つの小学校正門前で、登校時に数名でトラクト配布を行っているのです。何十年も前から継続している働きですので、小学校の先生たちも何ら抵抗なくトラクト配布を許可してくれま

す。近年は昔に比べて、子どもがトラクトを取ってくれる確率が顕著に低くなりました。それでも事前の案内配布によって、毎回の大会に普段教会学校に來ない五名前後の子ども達が参加してくれます。子ども大会のプログラムは1部が礼拝、2部がゲーム大会です。一部の奉仕者は司会者、ピアノ奏樂者、メッセンジャーがたてられ、時間は三十分程度です。プログラムは



秋のこども大会・ポップコーン



C S 秋のこども大会

黙とう、賛美、お祈り、賛美、暗唱聖句、メッセージ、お祈りで終わります。

二部のゲーム大会では、各部屋にそれぞれ違ったゲームを用意して、各ゲーム担当のCS教師たちが割り当てられ、子ども達が自由に各部屋を回って、ゲームを楽しみます。子ども達に一枚のカードを渡し、一つのゲームが済んだら、そのスタンプをもらい、全部のゲームが済んだら、ゲームが終わる仕組みです。ゲームは外の玄関前で水風船釣り、輪投げ、工作、暗唱聖句などです。子ども達が頭を使ったり、指先を集中させたり、想像力を働かせたりして五感を働かせ刺激させて、飽きないように努めています。ゲームが終わると、机や椅子を食事に配列して最後に夏ならアイス、またはお菓子をジュースを飲食して、牧師の挨拶と教会学校の案内を行い、最後の祈りをもって、子ども大会が閉じられます。

●子どもクリスマス

十二月の第三土曜日、午後二時から四時まで行いますプログラムは、春と秋の子ども大会がベースです。垂水教会の子ども大会は、毎年土曜日で同じ時間帯ですので、近隣の子ども達にある程度は認知されています。

子どもクリスマスは普通の子ども大会とは違い、普段本校の礼拝に出席している子ども達が、前々から練習してきた降誕劇または人形劇を披露します。劇が終わる、盛り上がったところでCS教師がサンタの衣装を着て、子ども達の前に現れ、子ども達の興奮が最高潮に達します。しばしサンタと子どもたちの問答が繰り返された後、サンタは退場して、教会学校本校の表彰式が始まります。最後に校長である牧師が閉会のお祈りをささげ、本校の教会学校の案内をして、解散という流れです。

近年は宗教に対する偏見や子どもたちの習い事などが増えて、本校や分校、子ども大会の参加人数は減少傾向にあります。けれども、素直な心をもった若い時に、教会に来て、福音にふれてくれれば、将来ふとしたことで教会へ足を運びやすいのは明快です。

全国の教会学校が祝福され、聖霊が働かれて、子ども達が教会へ行って救われ、信仰継承がスムーズになされていくことを願っています。「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」(伝道12・1)の聖句が、近隣の多くの子ども達に実現されるように祈り、主のみわざに期待して進んでいきます。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円(税込)でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇一三年度第II巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。新体制に移りましたが、従来通りの制作ができるようお祈り下さい。

今回の教師養成講座は、前号に引き続き、金井由嗣師に「カウンセリング・個人伝道②」を書いていただきました。「牧羊ひろば」は、垂水教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解	高橋頼男師	金井信生師	石田高保師
研究資料	鎌野善三師	福井文彦師	大頭眞一師
	宮澤清志師	金井由嗣師	小平徳行師
メッセージ例	中島啓一師	井上義実師	
	松浦みち子師	水野晶子師	和田 治師
ワーク(A)	飯田勝彦師		
(B)	鎌野 幸師	吉田美徳師	
(C)	竹崎光則師	勝田幸恵師	
中高科へのヒント	上森恭子師	田中裕明師	
子ども聖書日課	石田高保師	後藤健一師	
フラッシュカード	田中愛子師	小野淳子師	
	松浦あん姉	青木みぎわ姉	
	丹羽 遥姉	土屋直子師	
イラスト	丹羽 遥姉		
ワープロ打ち込み	多田豊子師		
校正	長田栄一師	加藤 清師	山田和幸師
	中島啓一師		

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者
二〇一三年度 II巻

二〇一三年七月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

神戸市兵庫区塚本通三三一九
電話 (078) 五七五二一五
FAX (078) 五七五二一六
印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 五七六二九六

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み